

大菩薩峠

伯耆の安綱の巻

中里介山



これよりさき、竜王の鼻から宇津木兵馬に助けられたお君は、兵馬恋しさの思いで物につかれたように、病み上りの身さえ忘れて、兵馬の後を追うて行きました。

よし、その言い置いた通り白根しらねの山ふところに入つたにしろ、そこでお君が兵馬に会えようとは思われず、いわんや、その道は、険山峨々ががとして鳥も通わぬところがある。何の用意も計画もなく分ける入ろうとするお君は無分別であります。

ムク犬は悄悄しおしおとして跟ついて行きました。そのさま、恰あたかも主人の物狂わしい挙動を歎くかのようであります。

丸山の難所にかかった時分に日が暮れると共に、張りつめた

お君の気がドツと折れました。

「ムクや、もう疲れてしまつて歩けない」

杉の木の下へ倒れると、ムクもその傍に足を折つて身を横たえました。

ムク犬が烈しく吠え出したのはその曉方あけがたのことでありました。お君はそのムク犬の烈しい吠え声にさえ破られないほどに昏睡状態こんすいじょうたいの夢を結んでいたのであります。

ムクの吠える声は、快く眠つてこころよいるお君の耳には入りませんでしたけれど、幸いにそこを通り合せた馬商人うまあきんどの耳に入りました。

まだ若い丈夫そうな馬商人は、小馬を三頭ひつぱつて、奈良田の方からここへ来かかりましたが、この曉方ひとあし、この人足の絶えたところで、犬のしきりに吠えるのが気になります。

「おやおや、この娘さんが危ない、こりや病氣上りで無理な旅をしたものだ」

この若い馬商人は心得てお君の身体を揉み、懐中から薬などを出してお君に含ませ、

「おい姉さん、しつかりしなさいよ、眠るといかんよ、眠らんで眼を大きくあいておらなくてはいかんよ、わしはこれから有野村の馬大尽うまだいじんへ行くのだが……」

ほどなくお君はこの馬商人うまあきんどに助けられ馬に乗せられて、有野村の馬大尽というのまで連れて来られました。

馬大尽の家の前まで来て見るとお君は、その家屋敷の宏大なのに驚かないわけにはゆきません。

甲州一番の百姓は米村よねむら八右衛門というので、それが四千五百石持ちということであります。和泉作いずみさくというのは東郡内で千石

の田畑を持つてゐるということでもあります。この馬大尽はもつと昔からの大尽でありました。

甲州の上古は馬の名産地であります。聖徳太子の愛馬が出たところから黒駒くろこまの名がある。その他、鳳凰山ほうおうざん、駒ヶ岳あたりも馬の産地から起つた名であります。御勅使川みてしがわの北の方には駒場村というのがあります。この有野村は、もと「馬相野うまあいの」と言つたものだそうです。お君が来て見た時、屋敷の近いところにある広い原ツばや、眼に触れたところの厩うまやを見てもちよつとには数えきれないほどの馬がいました。なるほどこれは馬大尽に違いないと思ひました。

それのみか、門を入つてからまるで森の中へ入つて行くように、何千年何百年というような立木であります。

「いっほんしきぶきようかつらはらしんのうさま一品式部卿葛原親王様の時分からの馬大尽だ」

と馬商人がお君に言つて聞かせただけのものはあります。

屋敷の中を流れる小流に架けた橋を渡つてしまつた時分に、木の蔭から現われた女の人が、

「幸内、幸内」

と呼びました。若い馬商人は、

「はい」

と言つて女の人を見てあわてたようでありました。

馬上のお君もまた、その声を聞いてその人を一眼見るとゾツ

としてしまいました。妙齡の面かおという面は残らず焼け爛ただれてい

るのに、白い眼がピンと上へひきつって、口は裂いたように強

く結ばせているから、世の常の醜女に見るような間の抜けた醜

さではなくて、断えず一種の怒気を含んでいる物凄ものすげい形相ぎやうそうです。

いつそう惨酷さんこくなのは、この妙齡の女の呪のろわれたのが、ただその

顔面だけにとどまるということです。着けている衣裳は大名の姫君にも似るべきほどの結構なものでありました。罪の深い悪病のいたずらか、その髪の毛だけを天性のままに残しておいてうるし漆の垂れるように黒く、それを見事な高島田に結い上げてありました。姿、形、作り、気品、その顔だけを除いて、もし後向きにうしろむきにしてこれをながめた時には、誰でもうつつ恍りとしてながめるほどの美人です。

馬に乗っていたお君は、それを突然に前から見えてしまいましたから、ゾツとしてふる慄え上りました。

「幸内、お前、いま山から帰つたの」

その呪われた妙齡の人は、つばき椿の花の一枝を持っていました。そうして若い馬商人を幸内、幸内と呼びかけては、こつちへ静かに近寄つて来るのであります。

「これはお嬢様、お早うございまする」

幸内と呼ばれた若い馬商人は小腰を屈かがめました。

「幸内、それはどこのお方」

と言つて、呪われた女の人は、そのひきつれた眼を銀の針のよ
うに光らせて馬上のお君を見ました。

その時に、お君は身の毛が立つて馬の上にも居いたたま堪らないよう
な気がしました。

無論、この時までムク犬は黙々として馬と人とに従つて跟つ
いて来ていたものですが、ここに至つてその鷹揚おうような頭を振上げ
て、呪われた妙齡の女の人の面かおをじつと見つめました。

「これは、丸山の下で、難儀をしておいでなさるところを助け
て上げたのでございます。まだ身体が弱つておいでなさるよう
でございますから、女中部屋まで連れて行つて休ませて上げた

いと思ひます」

「そう、早くそうしておやり、お薬が要いるならわたしのところまで取りにおいで」

「はい、有難うございます」

お君は馬上で聞いて、このお嬢様と呼ばれる人が、面付かおつきの怖ろしいのに似もやらず、情け深い人のように思われたのでホツと一安心です。

「それから幸内や、その馬を厩うまやへ廻まわしてしまつたら、父様のところへ行く前に、わたしのところへ、ちよつとおいで」

「はい」

「嘘うそを言つてはなりませんよ」

お嬢様はこう言つて、椿の花の枝を持ったままであちらへ行つてしまいました。嘘を言つてはなりませんよ、の一言ひとことに、針が

含まれているようにお君の耳には聞きなされます。しかしながら、お君の胸は、「おかわいそうに……」という同情が無暗に湧いて来て、その呪われたお嬢様のために、ほとんど泣きたくなつてしまいました。

二

お君は若い馬商人の幸内に引合わされて、女中の取締りをしているお婆さんに会いました。このお婆さんは幸内から委細の物語を聞いた上で、

「まずい物を食べてみんなの女中と同じように働いてもらいさえすれば、いつまでいても悪いとは申しません」

さしあたり、こう言われたことはお君にとって仕合せであり

ました。女中はみんなで十五人ほどいました。その女中のうちにもおのずから甲乙があつて、本人の柄によつて奥向のと下働きのと二つに分れています。

「わたしは、骨の折れるような力業ちからわざはできませんけれど、どうかお台所の方へ廻していただきとうございます」

とお君は、かえつて下働きを志願しました。

お君が好んで下働きを志願したのはムクがいるからであります。もし奥向を働くようになって、ムクと離れる機会が多くなると、ムクの世話を人手にかけるのが気にかかる。少しは骨が折れても、朝夕ムクと同じところにいることがどのくらい力になるか知れません。お君の仕事といつては、普通の台所の仕事のほかに、馬にやる豆を煮たり鶏の餌をこしらえてやつたりする手伝いで、大して骨の折れるようなことはありません。初

めのうちは自分が厄介やっかいになる上に犬までつれてと気兼ねをして
いましたけれど、これほどの大家たいけで犬一匹が問題にもならず、
心安く思っているうちに、ムクは早くも他の女中たちに可愛が
られてしまいました。女中取締りのお婆さんもまたムクを、男
らしい犬だと言って大へん可愛がるようになりました。

従来この家にいた幾多の犬も、ムクの姿を見た最初は吠ほえた
り睨にらんだりしてみましたけれど、二三日たつうちに不思議に懐
いてしまい、ムクが立つと、群犬がその周囲におのずから列を
作るようになりました。ムクが牧場まきばをめがけて歩を運び出すと、
群犬がそれに従って足並みを揃えて繰出すようになりました。
広々とした牧場、その中に逞たくましい馬や、愛らしい小馬の臥た
り起きたり鬣たてがみを振ったりしている中を、ムクが群犬の一隊をひ
きつれて一周する光景は勇ましいものでありました。お君は手

拭をかぶつて小流れの岸で、ほかの女中たちと一緒に野菜を洗いながら、ムクの勇ましいのを見て自分ながら嬉しくてたまりませんでした。

「こんな威勢のいいところを友さんに見せてやれば、どのくらい喜ぶか知れない、友さんもあんなところにくすぶ燻っているよりは、こんなお家へ奉公してお馬の番人にでもなればいいに」

とお君はムクの勇ましきから、米友の身の上を考えました。

それを考え出すと、いったいこの旦那様という方が、どんなお方であろうかということをも考え及ばさないわけにはゆきません。朋輩ほうばいの女中に向つて、

「お藤さん、御当家の旦那様はどちらにいらつしやるのでございますか」

「旦那様御夫婦のおいでなされるところは向うの屋根の大きなお

家さ、その向うに破風はふのところだけ見えるのが三郎様のおいでなさるところで、ここでは見えないけれど、あの櫓げやきの木のこんもりとした中にお嬢様のお家があるのですよ」

「お嬢様の……」

お君にはここで前の日に小橋のほとりで会った、かの呪われた妙齡の女の姿がいちずに迫って来ました。

「お君さん、お前はお嬢様に会いましたか、まだですか」

「いいえ……」

とお君は首を横に振ってしまいました。

「そうですか」

と言ったきりで、お藤は気の抜けたような面かおをしてお君を見ました。お君はこの場合、お嬢様の身の上のことを尋ねるのだが、なんだかそれは忍びない心持がしたから、取って附けたように、

「まだ、私は旦那様にもお目にかかりません」

「旦那様は、滅多に外へおいでになりませんけれど、どうかするとこの牧場まきばへお伴ともを連れて出ておいでなざることがありますよ」

「お年はお幾つぐらいでございます」

「もう、いいお年でしようよ、あの三郎様や、お嬢様の親御さんですから」

「三郎様とおっしゃるのは？」

「こちらの総領のお方、この馬大尽のおあとを取る方なのよ」

「それから奥様は？」

「奥様には、わたしまだお目にかかったことがありません」

と女中のお藤が言いました。

その家の女中でいて奥様を知らないということは、お君の耳

には奇異に聞えました。

「わたしが奥様のお面かおを知らないばかりでなく、うちの女中で、誰でもまだ奥様にお目にかかった者は無いのですよ。取締りのお婆さんだつて、奥様を知っているか知っていないか、あのお婆さんだけは、知っているには知っているでしょうけれど、それも知らないような面をしていますよ」

「それはどういふわけなのでございます、奥様は御別宅の方にもいらつしやるのですか」

「どういふわけだか、ほんとに、そう申してはなんですけれど、変なお屋敷でございますよ。奥様はこちらにおいでなさるとも言い、また御別宅の方においでなさるともいふのですが、その辺が永年御奉公をしていて、わたしたちにはさつぱりわかりませんの。けれども今の奥様が二度目の奥様で、旦那様よりズツ

トお若い方だなんて、女中たちの中では噂をしているものもあります。なんでも二度目か三度目の奥様に違いないので、あの三郎様やお嬢様の産みのお母さんではないのですね。なんだか変に、こんがらがっていて、とても、こんな大家の財産と内幕は、わたしたちの頭では算段が付きません。ただおかわいそうなのはあのお嬢様でございますね、あのお方はほんとうにおかわいそうなお方でございますよ」

「お嬢様が……」

どうしても話は、例のお嬢様のところへ落ちて行かねばならなくなりました。

お君が知らないと思つて、この女中は、お嬢様のことについてはかなりくわしくお君に話して聞かせました。お嬢様の名はお銀様ということ。それはそれは怖ろしいお面かお、と言う時にお

藤自身もゾツとして四辺あたりを見廻し、お君もあの時の面が眼の前に現われて身の毛が竦よだちました。なおこの女の語るところによれば、お嬢様のおんなお面になつたのは、ただに疱瘡ほうそうのためばかりではない、それより前に大きな火傷やけどをしたのがあなつたのだということでありました。誰かお嬢様にあんな火傷をさせた者があるのだというような口ぶりでありました。

してみれば、天然の病氣と人間の手とふたりがかりで、あのお嬢様という人の面を蹂躪じゆうりんしてしまつたことになる。なんといふ惨むごたらしい報いであろうと、お君は、どうしてもそのお嬢様のために心から同情しないわけにはゆきませんでした。

「これほどのお大尽でも、あればかりはどうすることもできませんね。それだからお君さんのような容貌きりようよしに生れつゝいた者は、お金で買えない幸福しあわせを持つてゐるわけですから、大切にし

なくてはいけませんよ」

とお藤はお君に向つてこう言いました。野菜類を洗つてしまつてから、お君はムクに食物をやろうとしました。

ところが、いつもその時刻には来ているムクが見えませんか、お君は牧場へ出て、遠く眼の届く限りを見渡しました。しかしそこにもムクの姿が見られません。思うに群犬を率いて興に乗じて、あの山の後ろの方まで遠征して行つたものだろうと、お君は強^しいては心配しませんでした。

この機会に少し牧場の状態でも見ておこうかと、お君はムクを尋ねながらに牧場の方へと歩んで行きました。

今、お君の頭の中では、ムクのことよりも一層、あのお嬢様のことと考えられてたまりませんでした。お君は自分ほど不幸なものはこの世にないと思つていた一人でした。ほとんど幸福と

いうものを持たずに生れて、不幸という浪の中にのみ揉まれて来たのが自分のこれまでの生涯だと思いました。それを今、あのお嬢様と比べて見れば、自分の方が確かに幸福者であると言われて、なるほどそうかと思わねばならないことほど無惨に感じたのであります。

病気をしたことのない者には、たっしや 壮健で無事であることの有難味がわからない。ともかくも、人並に生れついたということの有難味が、この時お君にわかってきて、自分ほど不幸な者はこの世にないと思っていた心は、ひが 僻みであつたり我儘であつたりしたのではないかとさえ思われました。百万長者の娘に生れたことが、この時にはお君にとつて少しも羨望ではありませんでした。そうしてこの気の毒なお嬢様の身の上で同情をしながら牧場を歩いて行くうちに、ついつい、お嬢様のお家の

あるところだという櫛けやきの林に近いところまで来てしまいました。もう冬と言つてもよいくらいですから櫛の紅葉は、ほとんど八やつヶ岳たけおろし風で吹き払われていました。木の下には黒くなつた落葉うずたかが堆く落ちていました。そこへ来てお君は、ここがあのお嬢様のお家であると思つて、そつと大きな櫛の蔭から垣根の中をのぞいて見ました。

そこにまた庭があつて、池や泉水や築山つきやまがあるのが見えました。そうして縁のところところに一人の男の人が腰をかけている様子であります。

「幸内、幸内」

と座敷で呼ぶのは、あのお嬢様の声。呼ばれて、縁に腰をかけたているのは、自分を助けて来てくれた若い馬商人。お嬢様の方の姿は座敷の中にいて見えませんが、幸内の姿は垣根越し

によく見る事ができました。

「幸内や、お前に貸して上げるには上げるけれど、お父様に話してはいけません」

「どう致しまして、旦那様のお耳に入りますれば、お嬢様よりは、わたしがどんなに叱られるか知れません」

「では大事に持つておいで。そうして三日たつたらきつと返してくるだろうね」

「それはもう間違いはございません」

「刀や脇差は幾本も幾本もあるのだけれど、この一腰ひとしはお父様が、わけても大事にしておいでなのだから」

「それは、もうよく存じておりまする、三日たてば間違いなくお返し申しまする」

幸内の前へお銀様は、手ずから長い桐の箱をさしおきました。

「これはどうも有難う存じます、お嬢様のおかげで日頃の望みが叶いまして、こんな嬉しいことはござりませぬ」

幸内は箱の上へお辞儀をしました。

「幸内」

「はい」

「お前がこの間つれて来た、あの娘はどうしています」

「へい、あれはおばさんに願ってお屋敷へ御奉公を致すようになりまして」

「あれはお前、お前が前から知っていた子ではないの」

「いいえ、そんなことはございませぬ」

「では、あの山で初めて会ったのかい」

「左様でござります」

「その後、お前はあの娘と口を利きましたか」

「いいえ、あれからまだ会いませんでございます」

「あの娘は容貌きりようがよい子でしたね」

「どうぞございましたか」

「あんなことを言っている、あの娘は綺麗きれいな子であつたわいな」

「面かおつきは、そんなでございましたか知ら。何しろ行倒れのよ
うな姿でございましたから、見る影はありませんでした」

「姿はやつれていたらけれど、ほんとに容貌きりよう美し、よく作つてや

りたい」

「一寸見ちよつとみはよく見えても、作つてみると駄目なんでございましたよ

う」

「いいえ、かまわないでおいてあのくらいだから、お作りをし
たら、どのくらいよくなるか知れない、わたしは着物を持って
いる、髪かみの飾りも持っている、貸してやりたい」

「お嬢様のそのお言葉をお聞かせ申したら、さだめて有難く思うことでございましょう、あの娘はほんの着のみ着のまま道に倒れていたのでもございませうから」

「わたしの物をそっくり遣やつてしまいたい、わたしなんぞこそ着のみ着のままでもいいのだから」

「お嬢様、何をおっしゃいます」

「ほほほ、わたしとしたことが、また我儘なことを言つてしまいました。幸内や、それでよいからお前は早くそれを持つておいで、誰かに見られると悪いから。見られてもかまわないけれど……」

「それではお嬢様、お借り申して参ります、三日目には必ず持つて参りますでございませう」

幸内は頭を下げて、その長い桐の箱を風呂敷いとまぎに包んで暇乞い

をしました。

「お前、帰りがけに、あの娘のところへ行つて、あの娘に、わたしのところへ遊びに来るように、と言つておくれ」

「はい、かしこ畏まりました」

そう言つて幸内は、長い桐の箱を小脇にして縁側を離れました。その桐の箱の中にはこのお嬢様の父なる人の、秘蔵の刀が入っているということが話の模様で推察されます。

お君が女中部屋へ帰つて針仕事をしている時分に、ポツリポツリと雨が降り出してきました。

「こんにちは」

内にいたお君は、それが幸内の声であることを直ぐにさと覚りました。実はもう少し早く幸内がお嬢様の言伝ことづつてを持って来るだろうと、心待ちにしていけないわけでもありませんでした。

「どなた」

それと知りつつもお君は障子をあけると、

「私」

「これは幸内さん、よくおいでなさいました」

見ると幸内は、こぎつぱりした^{あわせ}袷に小紋の羽織を引っかけて傘をさして、小脇には例の風呂敷包の長い箱をかかえて、^{よそゆき}他行のなりをしていました。

「さあ、どうぞお入りなさいまし」

お君は愛想よく迎えました。

「わしはこれから、ちと他^{よそ}へ行かねばなりません。あの、お君さん、お嬢様がお前さんに会いたいから、手がすいたら遊びに来るようにとお言伝^{ことづて}でござんすよ」

「お嬢様から？」

「あい」

「畏まりました、有難うございます」

お君は幸内のお使御苦労にお礼を言いましたが、幸内はそれだけの言伝をしておいてここを出かけて行きました。

お君は暫らく幸内の行くあとを見送っていますと、

「お君さん」

朋輩女中のお藤が後ろから呼びかけました。

「お藤さん」

お君はそれを振返ると、お藤は、

「まあよかったことね、お君さん、お嬢様から招よばれてよかったですことね」

「でも、わたし何かお叱りを受けるのじゃないか知ら」

「そんなことがありますものか、お嬢様はよくよくのお気に入

りでないと、こつちから何か申し上げてもお返事もなさらないの、それをお嬢様の方からお招よび出しがあるのだから、お君さん、お前はきつとお嬢様のお気に召したことがあるんだよ」

「そうだとよいけれど、わたしは何かお叱りを受けるんじゃないかと思つて」

「そんなことはありませんよ、わたしたちはこうして永いこと御奉公をしているけれど、まだお嬢様から、遊びにおいでとお迎えを受けた者は一人もありませんよ、それだのにお前さんばかり、そんなお沙汰があつたのだから、ほんとうに羨うらやましいこと」

「あの、お嬢様はお気むずかしい方ではありませんか」

「いいえ、あれでなかなか察しがあつて、よく行届くお方ですけど、好きと嫌いが大變お強くていらつしやる、このお屋敷

でも、幸内さんのほかにはお嬢様のお気に入りといつては
ないのですよ」

「幸内さんは、そんなにお嬢様のお気に入りなんですか」

「ええ、幸内さんの言うことなら、お嬢様は大抵のことはお聞き
なさいます、だから人が幸内さんとお嬢様とおかしいなんぞと
陰口を利きますけれど、まさかそんなことはありやしませんよ」

まだあけていた障子の間から外を見ると、笠をかぶつて包み
をかかえた幸内が、ちょうど、いつぞや入つて来た時に、お嬢
様と会つた小橋の上を渡つて行く後ろ影が見えました。

三

お君はお銀様の居間へ上りました。

「お前のお国はどこ」

「伊勢の国でございます」

「伊勢の国はどこ」

「古市でございます」

「古市と言やるは、あの大神宮のおありなさるところ？」

「左様でございます、大神宮様のお膝元ひざもとでございます」

「そこで何をしていました」

「あの……」

お君がちよつと返事に困ったところへ、不意に庭先へ真黒な動物が現われました。それはムクでありました。

「ムクや、こんなところへ来てはいけません、ここはお前の来るところではありません」

と言ってお君は、お銀様の手前、ムクの無躰ぶしつげなのを叱りました。

「これはお前の犬なの」

「はい、わたくしの犬なのでございます」

「まあ大きい犬」

「わたしのあとを少しも離れないので力になることもありますが、困ってしまうこともあるのでございます。さあ、早くあつちへ行つておいで」

「そんなに言わなくてもよい、主人のあとを追うのはあたりまえだからそうしてお置き」

「それでも、こんなところへ、失礼でございます」

「そうしてお置き」

ムクは許されたともないのに庭先へ坐つてしまいました。

「おとな温和しくしておいで」

お君もぜひなく、そのうえ追い立てることをしませんでした。

「このお菓子を食べさせておやり」

「こんな結構なお菓子を、勿体もったいのうございます」

お君はそれを辞退しました。お銀様は別段に強しいでもありません。

「今日は雨が降って淋しいから、お前、その伊勢の国の話をしてごらん、わたしはどこへも出ることがいやだから、他よその国のことは少しも知らない」

「お嬢様などは、お出ましになつてごらんあそばさずとも、御本や何かで御承知でございませうから」

「名所図絵やなにかで、わたしも御参宮のことを知らないではないけれど」

「大神宮様あつての伊勢でございますから、あの通りはたいそ
う賑やかでございます、その賑やかなところで、わたしは暮ら

しておりました」

「そこで何を商売に？」

「それはあの……」

かわいそうにお君は、また行詰つてしまいました。

その時、温和おとなしく軒下に坐つていたムクは、何に気がついたのか頭を上げて外を見ました。築山の向うの方を暫らく見込んでいたのが、やがて立ち上つてのそのそと雨の中を歩いて行きました。それが様子ありげでしたから、お君もお銀様も共に犬の行く方をながめました。その時に、

「姉様」

と言つて庭の方からこの場を覗のぞいたものがあります。

「三郎さん、ここに来てはいけません」

とお銀様は叱るように言いました。

「それでも……」

「お帰りなさい、それにまあ、雨の中を傘もささないで」

お銀様は呆あきれて見ていました。お君はやはり呆れたけれど、これはただ見ているわけにはゆきません。そこへ来たのは十歳ばかりの男の子であります。中剃なかぞりを入れないで髪をが、つ、そうにしていました。和やわらかい着物に和そでかい袖無羽織ほりを着て、さきに姉様と呼んだことから見ても、またお銀様が三郎さんと呼んだことから見ても、これはお銀様の弟の三郎様に違いないと思ひました。それであるのに誰つきびとも附人なしに、一人で雨の中を笠も被かぶらないで大人の下駄を穿いてそこへ、

「姉様」

と言つて入つて来たから、お君は呆れながらも黙つて見ておられませんから、

「坊ちやま^{ぼつ}」

と立つて抱いてお上げ申そうとするのを、お銀様が抑えて、

「いいえ、そうしてお置きなさい。三郎さん、お前はここへ来てはいけないというのに、ナゼ帰りません」

「だつて……」

三郎さんは、やはり雨の中に立つてお銀様の面をじつと見ていました。お君はどうしていいのかわかりませんでした。雨の中に傘なしで立つた三郎さんの面^{かお}を見ると、色の白い品の良いお子さんで、この大家の血統として申し分のないお子さんに見えました。ただその頬のあたりが子供にしては肉が落ち過ぎで、それがために、もともと人並より大きい眼が、なお一倍大きく見えるのであります。大きいけれども強い光はなく、^{ものう}懶いよ^うな色で満ちているから、品はよいけれども、どうも賢い子に

は見えません。

「ここへ来るとお母様に叱られますよ」

「でも……」

三郎さんは大きな眼をキョロリとして、お銀様の方を見て立って動こうともしません。雨が降りかかって頭から面に雫しずくがたらたらと流れ、和やわらかい着物がビツシヨリと濡れてしまつても、少しも気にかけないのであります。それをまたお銀様は見ているながら、ただお帰りお帰りと言うだけで、立って世話をし、てやるでもなければ、お君が立ちかけたのをさえ抑えてしまつた心持が、どうしてもお君にはわかりません。

「早くお帰りというに」

お銀様の権幕けんまくは凄すじくなりました。その釣り上つた眼の中から憎悪ぞうおの光が迸ほとぼしるように見えました。ただ姉が弟を叱るだけの態

度ではなくて、眼の前にあることを一刻も許すまじき嫌悪けんおの念から来るもののようにでしたから、お君はいよいよわからなくなつて、ほとほと立場に苦しむのでありました。

「姉様、お菓子頂戴」

それでも三郎さんは帰ろうとしないでこう言いました。そのくせ、姉の傍へは寄つて来ないで遠くから、いじけるように姉の気色を伺つて、やはり雨の中に立っているのでありました。キヨロリとした大きい眼の瞳孔どうこうが明けつぱなしになつてしまつているのを見るにつけ、このお子さんは人並のお子さんではないということを思つて、お君はお氣の毒の感に堪えられません。

「いけません」

お銀様はキツパリと断わつてしまいました。

見るに見兼ねたから、お君はお銀様の抑えるのも聞かずに立つ

て下へ降りて来て、三郎さんの傍へ寄り、

「坊ちやま、雨がこんなに降っておりますから帰りましょう、お召物がこんなに濡れてしまいました」

「打捨つてお置きなさい」

お銀様は相変らず怖い面をしています。

「ね、わたしに背負おんぶをなさいまし、あちらのお家へ帰りましよう」

お君は自分のさして来た傘を廻して、それを片手に持ち三郎様へ背を向けました。

お君がせつかく親切に背を向けたにかかわらず、三郎様はその時クルリと向き返つて、スタスタともと来た方へ歩き出しました。お君はそのあとから傘を差しかけて追つて行こうとするのをお銀様が、

「そつちへ行つてはなりません、そつちのお邸へ行つてはなりません」

命令するような強い声で呼び止めましたから、お君は立ち竦すくみました。

三郎様は大きな下駄を引きずつて雨の中を笠も被かぶらずに、悠悠とあちらへ行つてしまします。

「お前は、まだ知るまいけれど、此家ここではお互いの屋敷へは、滅多ゆきぎに往来をしないようになっていきます。あの子はそれを申し聞かされているはずなのに、こんなところへ来たからそれで叱りました」

「はい」

「さあ、お前はお上り。あの犬はどうしました、犬が母屋おもやの方へ行つて悪戯いたづらをするようなことはあるまいね」

「あの犬は悪いことは致しませぬ」

お君は再びもとの座に帰りましたけれど、このことからなるとなくそのあたりが白け渡しろつたようであります。

お銀様はせっかくお君を相手に、名所の話などをして興を催されようとしていた時に、三郎様が来てその御機嫌を、すつかり損そこねてしまったようであります。いかに大家とは言いながら、一つ屋敷のうちの親子兄弟別々に家を持っているさえあるに、弟は姉の住居すまいへ行つては悪い、姉は弟を送つて行くことを止めるとは何とということだろうと、お君は何事もわからないで、ただ悲しい心になつて気が深々と滅め入いるようでしたから、これではならないと思ひました。

そうして、なんとかして不快になつたお銀様の心を慰めて上げたいものだと思ひました。けれども何と云つて慰めてよいか

取付き場に苦しんでいましたが、そのうちにお君は、床の間に飾ってあつた琴を見て、音曲の話を引き出しました。それはこの場合、お君にとつてもお銀様にとつてもよい見つけものでありました。

「まあ、お前、三味線がやれるの。それはよかつた、わたしがお琴を調べるから、それをお前三味線で合せてごらん」

お銀様は大へんに喜びました。それで今の不快な感じが消えてしまった様子を、お君は初めて嬉しく思います。

その雨の日は、夜になつても二人の合奏の興が続きます。

四

神尾主膳はその後しばらく、病氣と称して引籠ひきこもつておりまし

た。引籠つている間も、分部とか山口とかいうその同意の組頭や勤番が始終しよつちゆう出入りしていました。今日はかねて前からくわだ企てをしておいたところによつて、多くの人が朝から神尾の屋敷へ集まつて来ました。

これは神尾の邸の裏の広場で試し物がある約束でありました。試し物はすなわち試し斬りであります。朝から神尾邸へ詰めかけて来た連中は、いずれも秘蔵の刀や自慢の脇差を持つて集まりました。

あらかじめ罪人の屍骸しがいを貰つて来てあつて、斬り手の役は小林という剣道の師範役、それに勤番のうちの志願者も手を下して、利鈍りどんを試みるということであります。

たとえ罪人の屍骸とは言いながら、人間の身体からだを試し物に使用するということはよほど変つたことであります。しかし、こ

の変つたことを日本の古来においては立派なる一つの儀式としてありました。江戸の幕府では腰物奉行こしものぶぎょうから町奉行の手を経て、例の山田朝右衛門がやること。その時は物々しい検視場、そこへ腰物奉行だの、本阿弥ほんあみだの、徒目付かちめつけだの、石出帯刀いわでたてわきだのといふ連中が来てズラリと並び、斬り手の朝右衛門は手代りてがわ弟子らと共に麻袴あさがみしもでやって来て、土壇どだんの上や試しの方式にはなかなかの故実を踏んでやることを、ここに集まつた勤番連中は、或る者は小林に試してもらつたり、或る者は自分で試したりしてみることになり、見事に斬つたのもありました。斬り損じて笑ひ物になるのもありました。その度毎に刀の利鈍の評判が出ました。腕の巧拙の評判も出ました。或いは刀は良いけれども腕が怪しいと言われてしよげるもあり、刀はさほどでないが腕の冴あっぱえが天晴れあっぱと言つて賞められるものもありました。

そのなかでも師範役の小林は、さすがに剣道の達人だけあつて、斬り方がいちばん上手じょうずでありました。今までに試し物を幾度いくたびもやった経験や、盗賊を斬つて捨てた経験を話して、一座を賑わせましたが、一通り試し物も済んでの上、弟子を連れて辞して帰ろうとする時分に、神尾主膳がそれを呼び留めました。

「小林氏、お待ち下さい、今日は貴殿に見ていただきたいものがある、貴殿の鑑定並びに並々方なみなみがたの御意見を聞いておきたい物がある、お暇は取らせぬによつて、暫時さんじお待ち下されたい」

「してその拝見を仰付けおおせつられる品は？」

「ただいま持参致させる、いや、もう来そんなものじゃ、かねて約束しておいたこと故、間違いはないけれどまだ見えぬ、おつけ見えるでござろう、いま暫らく」

と言つて神尾は人待ち顔に見えます。小林師範も神尾が何物を

見せてくれるだろうと、坐り込んで待つことになりました。その他一座の連中も多少の好奇心に誘われます。

「神尾殿、我々に見せたい品とおっしゃるその品は？」

「まず、お待ち下され、到着しての上で御披露する」

神尾の言いぶりが事実を明かさないのでおいて、あつと言わせようという趣向のように見えます。

そこへ用人が出て来て、

「幸内が参りました、有野村の幸内が推参致しました」

「あ、幸内が来たか、待ち兼ねていた、急いでこれへ」

その席へ呼ばれて来たのは、有野の馬大尽うまだいじんの雇人の幸内であります。

幸内は前にお君のところへお銀様の言伝ことづてを言つた足でこちらへ来たものと見えます。そうして昨晚はどこか甲府の城下へ宿

を取つていたものでしょう。

「これは皆様」

と言つて幸内は遙かはるの下座しもざから平伏しました。ここに集まつている連中は、みんな両刀の者であるのに、幸内ばかりが無腰むこしの平民、しかも雇人の身分でありましたから、遠慮に遠慮をして暫らく頭を上げません。幸内の平伏している傍にはその持つて来た長い箱が萌黄もえぎの風呂敷に包んで置かれてあります。

「おお、幸内、よく見えた、御列席の方々も其方そのほうの来るのを待兼ねじゃ」

「遅れましてなんとも申しわけがござりませぬ」

「遠慮致さず、これへ出るがよい」

「左様ならば御免下されませ」

幸内は恐る恐る出て来ました。

「おのおの方」

と言つて、神尾主膳は一同の方に向き直りながら、

「ここに見えたのは、これはおのおの方も御存じのことと思わ
るるが、有野村の伊太夫の家の雇人じゃ、あの馬大尽の雇人で
あるが、民家の雇人に似合わず感心なもので、剣術がなかなか
達者である、村方でも稽古をし、この城下の町道場へもおりお
り通う、いたつて手筋がよろしい、お見知り置き下されたい」
と言つて紹介しました。幸内は、こんなお歴々の方の中へ剣術
が達者だの手筋がよいのと吹聴ふいちようされたから、さすがに面を赭あか
してしまつて、

「恐れ入りましたでござりまする」

平伏してやっぱり頭が上りません。

「そのように恐れ入らんでもよい、実は今日は其方そのほうを上客にし

たいくらい。いつもは伊太夫の雇人であるが、今日は位がついて来たのじゃ。例の品は持って参つたことであらうな」

「へへ、恐れ入ります。せつかくの殿様のお言葉でござりまする故、主人から借受けて参りましてござりまする」

「それは大儀大儀、よく借受けて来た。伊太夫は変人のことでもあり、ことにあの品は滅多に人に見せぬ品であるそうな。其方の働きで、ここまで持参して来たのは何よりのこと」

「これがその品でござりまする」

幸内は、やはり恐る恐る萌黄包もえぎづつみの長い箱を差出しました。

この箱は、前の日、幸内がお銀様から三日の約束で借受けて来た箱であります。この席へ持つて出るために幸内は、この箱をお嬢様から借受けたのだということがわかります。

「おお、それぞれ」

と言つて神尾主膳は、その箱を受取りながら、

「おのおの方に、この品をお目にかけてたい。その前に申し上げておきたいことは、この品はあの有野の馬大尽の家に先祖より伝わる秘宝、御列席のうちにも名のみ聞いて実を見んと思わる向きが少なからぬことと推察致す。門外不出とも言うべきこの品を、この席に限りて一見致すことは仕合せ、充分の御鑑定を承りたいものでござる」

神尾主膳は風呂敷の結び目を解きかけてこう言いましたから、

かつらはらしんのう

列席の者がなるほどと感心しました。葛原親王以来と言われる有野の馬大尽の家には無数の秘宝があるということだが、そのうちにも一本の名刀がある。それは非常な名刀であるという評判だけを聞いていたが、まだ見た者がありません。見ようとしても主人の伊太夫が頑固で容易に見せないとのことでありまし

た。そのうちの名刀を今この席で一見することができるとい
のは、一座の好奇心の期待に反そむかないことでもあります。

「それは、それは」

と言つて列席がどよみ渡りました。さすがに神尾殿は苦労人だ
けあつて、人を待たしおいて、アツと言わせる趣向がうまいと
感じたものもありました。

何か趣向をしておいて、アツと言わせるということは、似え非
茶人や似非通人のよくやりたがることでもあります。神尾は人を
招いた時は、いつでも何かこんなことをしたのであります。
た。そうして、さすがの御趣向だと言われることを以て大得意
になる癖がありましたのです。

しかしながら、列席の者のうちには、アツと言つたものばかり
はありませんでした。例のいやみな神尾の癖がと、苦にが々しい面かお

をして控えているのもありました。その苦々しい面をして控えている者も、神尾のやり方のいやみなのに苦々しい面をしたので、その名刀を見たいという熱望は決して苦々しいものではありません。ことば 辞を厚うし、身を謙下へりくだつても後学のために見ておきたいと思つていたところでありましたが、神尾があんまり我物顔わがものがおに思わせぶりをするものだから、

「いかにも、あの有野の伊太夫が家に名刀があるとはかねて噂うわさに聞いていた。噂に聞いたところによれば、源氏の髭切膝丸ひげきりひざまる、平家の小烏丸こがらすまるにも匹敵するほどの名剣であるそうな。しかし誰が行つても見せたことはない、見た者もないという。それ故、あの名刀は評判倒れ、実はそれほどでもない剣をつるぎ、あんまり評判が高くなつた故に、人に見られるのがきまりが悪く、それ故秘して置くという陰口もござる。今日はそれらの疑いが残らず晴

れることでござろう、喜ばしいことでござる」

やや皮肉まじりに言い出でたのは、鉄砲方の平野老人でありました。

「まことこの品が噂通りの名剣であるか、或いはさほどのものではないか、御一見の上でおのおの方の腹藏なき御意見を承わりたい。拙者とても今日はじめて見る品」

神尾は平野老人の言い方が少し癩しやくにさわったようでありました。しかしこの老人はこの席の中での刀の目利めききでありましたから、多少は警戒しました。万々が一、この刀が評判ほどのものでないとすれば、真先にこの老人から槍が出ると思いましたから、少しは気味が悪いと見えます。それだから自分はまだこの刀を見ていないのだという予防線を張って用心をしておきました。そう言っておけば万々が一、この刀がそれほどのものでな

かつたにしろ、幾分は責任が逃^{のが}れるし、もし評判通り非常な名剣であつた時には、思い入りこの老人からとつちめてやろうという腹なのでしよう。

それですから老人の方でも、また多少の意気張りが出て、眼鏡を拭いて掛け直しました。平野老人につづいては師範役の小林が名を得ていました。この兩人のほかの者といえども、刀についてのみな相当の眼を持つていないものはありません。或いは平野や小林以上に、眼の肥えていて名の聞えないものが一座の中にいないとは限りません。

一応アツと言わせたけれども、あけて口惜しき玉手箱ではせつかくの趣向がなんにもならぬ。こんなことならば、一応自分が見ておいてから、この席へ出した方がよかつたと神尾は、多少自分の軽率を悔ゆるようになりつつ、ようやく包みを解いてし

まつて、箱を開くと古錦襦こきんらんの袋の中には問題の太刀が一振ふり。それから神尾が袋を払つて、その白鞘しらさやの刀に手をかけて鄭重ていぢゆうに抜いて見ました。

刀身の長さは二尺四寸。神尾主膳がそれを抜いてつくづくと見ると、例の平野老人は眼鏡かおの面をそれに摺すりつけるようにして横の方から見ました。小林文吾もまたそれを前の方からながめていました。一座の連中は、或いは近いところから、或いは遠いところから、しきりに覗のぞいたり眺めたりしていました。主膳はつくづくと見て、

「うむ」

と考え込んでいましたが、そのままなんらの意見も述べないで平野老人の手へと渡してやりました。平野老人はそれを恭うやうやしく受けて改めて法式通り熟覧しました。平野老人は打返して二度

まで見ました。

「うむ」

これも唸るうなるように、うむと力を入れて言つたままで、次なる師範役の小林文吾の手へと渡してやりました。小林師範がそれを受けてしきりにながめましたけれども、これも一言も意見を述べませんでした。そうして、やはり無言のまま次へ渡してしまいました。同じようにしてその刀が列座の人々の手から手に渡されて、いずれも考えを凝こらしてながめていましたが、誰とて、それについて極きわめをつけてみようというものはなく、こうもあろうかという意見をさえ述べるものはありません。そうして無言のままに受取られて刀は席を一巡し、ようやく神尾主膳の手に戻りました。

「さて、いかがでござるな、おのおの方」

その刀を鞘へ納めながら神尾主膳は一座を見廻しました。けれども、誰もまだウンともスンとも言いませんでした。相州物であろうとか、いいや備前とお見受け申すとか、おおよその見当さえ附ける人がありませんでした。おおよその見当を附けてさえ笑われることを恐れるほどに、わからないのがこの刀でありました。

「まち区よりいつたいにいためはだ板目肌が現われているようでござるな」

平野老人がようやくこれだけのことを言いました。相州物とも大和物とも言わないで、肌のことから言い出したのは、大綱たいこうを述べないで細論にかかったようなものでありました。この老人も多少てこずったものと見えます。

ともかくも平野老人が、これだけの口を開いてみると、次には小林師範役がなんとか言わなければならぬ立場になりました。

た。

「模様を一見したところでは、肌が立って地鉄じがねが弱いようにも見受けられる……が」

最後のが、というところへ、最も多くの余地を残しておきました。

「左様」

平野老人は吞込んだように頷うなずきました。しかし何が左様だか列座の人には、あんまり吞込めないようであります。そこで老人は、

「その地鉄がなあ」

と付け足したけれども、地鉄がどうしたのだから、いよいよ吞込めなくなりました。これだけ言いかけたら、あとは小林師範役か誰かがバツを合せてくれるだろうと思っていたところが、小

林はそれからなんとも言いませんでした。一座の者も黙っていましたから、老人は自身の言葉尻を持扱っていると列座の中から、

「のりしげ則重……則重……則重ではないか」

と吃りながらこう言った者がありました。これはそそっかしいので通った市川という御蔵おくらの係りでありました。まだ誰も剣呑けんおんがって国も言わなければ年代にも触さわつてみないうちに、早くもその銘を言つてしまったところがわかります。そそっかし屋であり正直者であることがわかります。

「以てのほか」

平野老人は首を振つて肯うけがいませんでした。市川の言つたことを刎はねつけることによつて、自分がもてあました言葉尻が立て直りました。

「則重ではござらぬ」

平野老人は首を振ったから、そそっかし屋の市川は一時、面かぶりを赤くしましたけれど、老人があんまり手厳てきびしく匆はねつけたものですから、反抗の気味となつて、

「そ、そ、そんならば、そんならば、老人のおめききは……」
と言つて反問しました。焦せき込むと吃どもる癖があるから、いつもならばおかしいのであるけれど、誰も笑いませんで、かえつて市川に同情するような心持で、老人の返答を相待つていような者さえあります。それは則重と見たものがこの市川一人ではなく、だいぶ同意見の者があるらしいのです。市川と同意見であるけれども、まだそうも言い出し兼ねている時に市川が皮切りをしたから、わが意を得たりと言わぬばかりに、内心で市川に同情しているらしい者もあります。

「なるほど、則重と言いたいところである、一応はそう言つてみたいところで、市川氏のおつしやるのも御無理はない、大湾おおのたれに鉾にえが優すぐれて多く匂いの深いところ、則重の名作と誰も言つてみたいが、それよりはずんと高尚で且つ古いものじゃ」

平野老人はこう言いました。

「そ、そんならば老人のお目利めきぎは？」

市川は再び老人に返答を促うながしたけれども老人は、頓とみに返事ができないで困くるんでいる様子を小林師範かたわらが傍かたわらから見て、

「これは近頃の好題目、口に出して言うては皆々遠慮がある故に、入札いれふだとしてみたらいかがでござるな、各自の見るところを少しの忌憚きたんなく紙へ書いて、名前を記さずにこれへ集めてみようではござらぬか」

小林がこう言い出したのは、老人にも救いであり一座もみな同

意しました。言い出したいけれども恥を搔くといけな
て遠慮していたものが多いのを、それが無記名投票になれば恥
はかき捨てになり、当れば名誉になるのですから、たちま忽ちに多数
の同意を得て筆と紙との用意が出来ました。おのおの筆を取つ
て紙片に思う所を書いて捻つて盆に載せ、二十余人の者が残ら
ず投票をしてしまつた後に開票のことになりました。

開票して見ると、その鑑定に大胆を極めたのもあり、小心翼翼
と疑問を存したのもあつたが、いずれもそれを古刀と見ること
には異議はありません、新刀と書いたものは一人もありません
でした。びつちゅう備中の青江あおえであらうと書いたり、なりむね備前の成宗と極めを
つけたのもあり、大和物の上作と書いたのもあり、或いは、飛び
離れて天座神息などあまくらしんそくと記したものもありました。その観みるとこ
ろの区々であるだけ、それだけ捉まえどころが少ないものと見

えましたが、さすがに則重と書いたものが六枚ありました。二枚三枚と適合したのはほかにもあつたけれど、六枚揃うたのは則重だけでありました。

「どうもわからぬ」

開票してみても、いよいよ刀のえたいが不思議になつてしまいました。則重もまた正宗門下の傑物だが、今ここに評判に上つているような宝物としては物足りないであります。

「それでは、いよいよ則重かな」

一同の面かおの色にありありと失望の色が見えまして、それがやや軽侮けいぶの表情に変わつて行くのを見ていた馬大尽の雇人幸内は、たまらなくなりましたから、

「申し上げます、これは則重ではござりませぬ、数年前、本阿弥ほんあみ様が主人の家へお立寄りになりました時分の御鑑定によります

れば……」

さてこそ本阿弥が引合いに出されて来ましたから、一同は言い合わせたように幸内の面を見ました。本阿弥という名前は、ともかくにもこの場合、重きをなすのであります。

「本阿弥家の折紙があるならば、あるように最初から言っておくがよい」

と平野老人が呟つぶやきました。

「いいえ、折紙があるのでござりませぬ」
と幸内は言いわけをしました。

「どうしたのじゃ」

「本阿弥様は折紙を付けませぬ、手前共の主人も折紙を付けていただくことは嫌いなのでござりまする」

「して、本阿弥がなんと言った」

「本阿弥様が申しまするには、この刀は伯耆ほうきの安綱やすつなであろうと
のことでござりまする」

「ナニ、伯耆の安綱？」

「はい」

「ははあ、伯耆の安綱か」

と言つて、いったん鞘さやに納められた太刀たちが再び鞘から抜け出
しました。

「なるほど」

「なるほど」

彼等は手から手に渡してつくづくとながめました。

「それだから言わぬことではない、一見しては地鉄じがねが弱いよう
だけれど、よく見ていると板目が立ち、見れば見るほど刃の中
に波が立ち、後世の肌物はだものとはまるで違う」

平野老人は得意になりました。さながら本阿弥を自分の味方に引きつけたように、鼻高々と一座を見廻すと、小林師範役は、
「なるほど、そう言われて仔細に見ると、地鉄に潤うるおいがあつて、弱いようなところに深い強味がある、全く拙者共の目の届かぬも道理」
と言つて服してしまいました。

「伯耆の安綱というのはこれか、名にのみ聞いて、拝見するは今日が初め」

一座は幾度も幾度もその刀を見ました、見れば見るほど感心の体ていでありました。主人役の神尾主膳も得意になつてしまい、則重すねちかといった人々さえ、自説の破れたことは悔いしないで、その刀に見惚みとれてしまつていました。自然、幸内の肩身も広くなり、
「本阿弥様も、しかと安綱とは仰せになりませんで、もし伯耆

の安綱でなければ、それと同じような、またそれよりも上の作であろうと御鑑定になりましたそうでございます」

「なるほど」

「かよう斯様な刀には我々共が極めをつけるは恐れ多いと本阿弥様がごけんそん御謙遜になり、主人もまた、極めをつけていただくことが嫌いなのでございまして、ただ宝刀としてしま蔵つて置きましたのでござりまする」

「なるほど」

ここの一座には、安綱を見たものはいずれも初めてでありました。

伯耆の安綱は大同年間の名人、その時代は一千年以上を隔てたものです。よし安綱であつてもなくても、それと同格或いは同格以上のものであらば、それは宝物とするのに充分でありま

す。

見直しているうちに、一座は誰とてそれに不服を唱えるものはありませんでした。

「摂州多田院の宝物に童子切どうじぎりというのがあるそうじゃ、これはみなもとのらいこう

源頼光が大江山で酒吞童子しゅてんどうじを斬った名刀、その刀がすなわち

伯耆の安綱作ということだが、拙者まだ拝見を致さぬ。その他、

大名のうちに、稀には安綱があるとも承ったけれど、いずれもその名を聞くばかり」

と言つて平野老人は、再び手許に戻つて来た名刀を貪り見ると、神尾主膳もまた老人と額ひたいを突き合せるようにして刀ばかりを見ていました。

その席はそれで済みました。主人も客も、始めあり終りある会合を満足して退散しました。

ただここで変なことが一つ起りました。それは幸内の行方ではありません。幸内はあれから御馳走になつて神尾家を辞したのは夕方のことでありました。もちろんその帰る時も小腋こわきには、伯耆の安綱の箱を抱えて帰つたのでありますが、それが有野村へは帰らずに、途中でどこへ行つたか姿が見えなくなつてしまいました。

有野村の馬大尽の家では誰も、幸内がこの会合の席まで来たということを知つたものではありません。一日や二日帰らないからと言って、それはいつもあることだから誰も不思議とは思いませんでした。ただ一人、心配なのはお銀様ばかりです。今日

で約束した三日の期限が切れるのに、幸内がまだ帰って来てくれないことをお銀様は心配していました。三日の期限が切れたから、直ぐにお父様に咎められるというわけではないけれど、あの刀は秘蔵の刀である故に、心配になります。

それでも、幸内を信じたお銀様は、やがて幸内が持つて帰ることと信じていました。

けれどもその三日も過ぎてしまったその夜も、ついに幸内が帰りませんでした。夜が明けてお銀様は、やや強くそのことを心配しはじめた時分にこの屋敷へ、馬に乗って若党をつれた立派な武士が、不意におとずれて来ました。

その武士が来て案内を乞うと、有野家の執事しゅじといったような老人がまず騒ぎはじめました。

「御支配様がおいでになった」

その騒ぎがお銀様の部屋までも聞えると、

「御支配様がお見えになったそうな」

と、お附のようになっていられるお君を顧みてお銀様が言いました。

「御支配様とはどんなお方でございますか」

とお君が尋ねました。

「それはこの甲府のお城を預かつて、勤番のお侍をお差さしずなされるお方」

とお銀様が説明しました。

「それではあの、甲府のお城の殿様でございませうね」

とお君が受取りました。

「この甲府には大名はないけれど、あの御支配様が同じお勤めをなさいます」

「こちら様へはたびたび、その御支配様がおいでになるのでご

「ございますか」

「いいえ、滅多にそんなことはありません、もしそんなことのある時は、前以てお沙汰があるのに、今日はどうしてまあ、こんなに不意においでになったのでしょうか」

不意にこの馬大尽うまだいじんへ訪ねて来たのは駒井能登守でありました。

新任の勤番支配が何用あつて、先触さきふれもなく自身出向いて来られたかということとは、この家の執事を少なからず狼狽ろうばいさせました。

「馬を見せてもらいたいと思つて、遠乗りの道すがらお立寄り致した次第、このまま厩うまやへ御案内を願いたいもの」

こう言われたので執事は安心しました。

こうして駒井能登守は、有野村の馬大尽の伊太夫に案内され、その厩まきばと牧場を見廻つています。能登守には若党と馬丁とが

附いていました。伊太夫には執事の老人と若い手代とが附いていました。伊太夫は六十ぐらいの年輩でありました。馬を見ながら、あるところは能登守の説を謹んで聞き、あるところは能登守に教えるようなことがあります。

「名馬というものは滅多に出て参るものではござりませぬな、こうして数ばかりはいくらか揃えてござりますれど、いずれを見てやまがも山家育ちで……せめてこのなかから一頭なりともお見出しにあずかりますれば、馬の名誉でほまれござりまする、また拙者共の名誉でござりまする」

こう言つて厩を見て行つたが、一つの馬の前へ来ると能登守が、しばらく足を留めていました。伊太夫その他の者もまた同じくその馬の前でとまりました。

「この馬は強い馬らしい」

能登守が立つて見ている馬は、今まで見て来た馬のうちでいちばん強そうな栗毛くりげの馬でありました。

「よくそれにお目がとまりました、その辺がここでは逸物いちもつでございましょうな、牧場の方へ参ると駒で一頭、ややこれに似た悍かんの奴がござりまするが」

「これで丈たけは？」

手代が主人に代って、

「四寸でござりまする」

「なるほど」

能登守は、まだいろいろとその馬をながめていました。

「お気に召しましたらば、一責ひとせめ責めて御覧遊ばしませ」

伊太夫は傍から勧めました。

「どうも、拙者には、ちと強過ぎるようじゃ、馬はまことに良

い馬だけれど」

「左様なことはございますまい」

「昔、楠正成卿は三寸以上のを好まれなかつたとやら。四寸の強馬つようまは分に過ぎたものに違いないが、しかし乗って面白いのは、やはり少々分に過ぎたものを乗りこなすところにあるようじゃ」

「左様でございますとも、そのお心がけさえおありなされば、どのようなお馬にお召しなされてもお怪我はあるまいと存じます。それに私共にては、見所みどころのありそうな馬には、昔の掟通りおきてしろくくつわ

白轡さしなわ五十日、差繩さしなわ五十日、直鞍すげら五十日を馬鹿正直まがたに守つて仕込ませました故に、拍子ひょうしもわりあいによく出来ているつもりでございますりまする」

伊太夫はこんなことを能登守に向つて語りました。能登守はこの栗毛の馬に乗つてみようという心を起しました。

ほどなく能登守が馬に乗つて勇ましく馬場を駆けさせる姿を、伊太夫はじめこちらから見ていました。

それとは少し異つた^{ちが}ところで、

「お君や、あのお方が御支配様でありますよ」

と言つて、椿の木の下でお君を招いたのはお銀様であります。

「まだお若い方でございますね」

お君も木の蔭に隠れるようににして、やや遠く能登守の馬上姿を見ていました。

「ほんとに、まだお若い方」

とお銀様が言いました。お君が気がつくとき、お銀様が馬上の御支配様を見ている眼の熱心さが尋常でないことを知りました。

お銀様も、やはりお若いお嬢様である。お若い殿方を見るのはいやなお気持もなさらないものかと、お君はそぞろに気の毒

になつてきました。それで自分もその御支配様が、馬に召して、だんだんに近いところへ打たせておいでになる姿を、お銀様と同じようにながめていきますと、

「お幾つぐらいでしょうね」

お銀様がこう言いました。

「左様でございますね」

お君は、この時に御支配のお面とお姿とをよくよくとながめました。馬は二人の方へ向いて駈けて来ました。その間はかなりありましたけれど、こちらは木の蔭に隠れていましたから、向うではわかりません。

「お嬢様、御支配様は大へんお綺麗なお方でございますね」

「ええ」

とお銀様はこのとき振返つて、お君の顔を見た眼つきに悲しい

色が浮びます。

「帰りましょう、失礼だから」

自分が先に立ってさつきと家の方へ行つてしまいます。お君はぜひなくそのあとをついて行きました。

お居間へ帰るとお銀様は、わざとしたような笑顔を作つて、「お君や、お前の髪の毛が少し乱れている、それをわたしが直して上げましょう」

と言ひ出しました。

「お嬢様、それは恐れ多いことでございます」と言つてお君が辞退をしました。

「いいから、ここへお坐り」

強^しいて鏡台の前へお君を坐らせて、お銀様はその後ろへ廻りましました。

お銀様は少し乱れたお君の髪を撫でつけてやりました。そうして自分の差していた結構な簪かんざしや櫛くしを抜き取つて、それをお君の頭に差してやりました。

お君は、お銀様がなんでこんなことをなさるのかと変に思われてたまりません。

「お君や、お前、今日はわたしになつてごらん、わたしと同じ髪を結つて、わたしと同じ着物を着て、そうしてお前がこの家の娘になるといい」

「お嬢様、何をおっしゃいます、飛んでもないことを」

お君は呆あきれていますと、

「わたしがお前になつて、お前がわたしになつた方がよい、ね、そうしてごらん、わたし、こんな髪の飾りも要いらない、こんな着物も要らない、帯も要らない」

「まあ、お嬢様」

お君がいよいよ呆れた時に、外でムクの吠える声がありました。髪飾りも要らない、着物も要らない、帯も要らないと言つたお銀様は、お君の呆れて言句ごんくも出でない間に、ついと次の間に行つてしまいました。

お君はそれも気にかかるけれど、いま吠えたムクの声も気にかかります。障子をあけて見るとムクが、今しも馬に乗つて馬場の外へ打たせて行く能登守の馬を追いかけて、その足許からに絡みつくようにして吠えています。

「まあ、あの犬が殿様に……失礼な」

お君は驚きました。ムクを呼んで叱らなければならぬと思ひました。

「お嬢様、ムクが殿様に失礼をするといけませんから呼んで参

ります」

と断わつて、あわててそこを駈け出して、

「ムクや、ムクや」

お君はやや遠くから呼びました。お君から呼ばれさえすれば、いくら遠くにいてもかえつて来るムクがこの時は、いよいよ能登守の馬の足に絡みついて、遠くから見ていると馬と人とを襲うているように見えます。

それを馬上の能登守がもてあましているようでしたから、お君は安からぬことに思うて息を切つて、馬場から牧場の方へと枯草の原を駈けて行きました。

そのうちに、駒井能登守はたまり兼ねて馬から下りてしまつたようであります。或いはムクが烈しく襲いかかったために落馬をされたのではないかと、お君はいよいよ安からず思いまし

た。

馬から下りた能登守が、馬の口を取っていると、その時にムクも温和おとなしくなつてしまいました。そこへ息を切つてお君が馳せつけて来て、

「ムク、まあどうしたのです、お殿様へ御無礼を申し上げて」

お君は、せいせい言いながらムクを叱りました。駒井能登守は莞爾かんじとしてムクの頭を撫でながら、

「叱つてはいかぬ、こりや良い犬じゃ、この犬のおかげでわしは助かつたのじゃ」

と言つて駒井能登守は、一間ほど前のところの草の中を指さし、

「そこに古井戸がある、その古井戸へ、すんでのことに馬を乗りかけるところであつた、それをこの犬が追いかけて来て留めてくれた、初めは狂犬かとも思つて、鞭むちで二つ三つ打ち据えた

が、それでも退かぬ故ようやく気がついた、この犬がいなければ、わしは馬もろともこの古井戸へ落ちて助からぬことであつた、ああ危ないことであつたわい」

と言つて、能登守は汗を拭きました。

「まあ、左様でございましたか。ムクや、よくお殿様に危ないところをお教え申しました、お前はやっぱり良い犬でした」

お君は駈け寄つてムクの首を抱きました。その時、能登守はお君とムクとを見比べていました、

「この犬は、お前の犬か」

「はい、わたくしの犬でございます」

「お前はここの家の……」

「雇人でございます」

能登守は、お君とその犬との親身しんみな有様をじつと見つめてい

ました。伊太夫はじめ能登守のお伴ともの者がそこへ駈けつけたのはその後のことであります。

駒井能登守は有野村の馬大尽のところから帰り道に、

「一学」

と言つて若党の名を馬の上から呼びました。

「はい」

「あの犬を大切にしていた娘を、そちは見たような女と思わぬか」

「はいはい、そのことでござりまする、私もそのように申し上げようかと存じておりましたところでござりまする」

「何と思うていた」

「遠慮なく申し上げてもよろしうござりましょうか」

「遠慮なく申してみるのがよい」

「左様ならば申し上げてしまいまする、あの女の子は奥方様に生写しでござりまするな」

「そうか、拙者わしもそう思うたからそちに聞いてみた」

能登守は莞爾として一学を顧みました。

「左様でござりまする、奥方様より歳は二つ三つ若いようござりまするが、あれで奥方様と同じお作りを致させますれば、全く以てわたくしたちまで見違えてしまふでござりましょう」

「その通りじゃ」

そうして馬を打たせて、御勅使川みてしがわの岸を東へ歩ませて行きました。

「殿様」

「何だ」

「あの、奥方様はいつごろ、こちらへお見えになりまする」

「それはいつともわからん」

「御病氣の御容態は、いかがでござりませうかごようす」

「別に変りはないようじゃ」

「一日も早くお迎え申したいと、家来共一同、そのことのお噂を申し上げない日とはござりませぬ」

「年内はむずかしかろう、年を越えてもことによると……」

「来春になりますれば、ぜひお迎えに上りとう存じまする」

「あれもこつちへ来たいと言つて、いつの手紙にもそのことを書いてあるが、あの身体では覚束おぼつかない故に留めてある」

「殿様も御心配でございませうけれど、奥方様もさだめてお淋しいこととございませう、どうか早くお迎え申したいものでござりまする」

「一学」

「はい」

「あの栗毛を受取りに行く時、あの女にも何か物を遣わしたいものじゃ」

「左様でござりまする」

「あの犬のために怪我をせず済んだのじゃ、犬と持主に心付けを忘れぬように」

「しかるべきものを調ととのえまするでござりましょう」

「その時に、一応あの女の身の上を聞いてみるがよい、もし邸へ来るような心があるならば、伊太夫へ話をして呼んでみてもよい」

「はい」

一学は主人が、あの女のことを親切に思っていることに気が

つきました。

六

馬大尽の雇人の幸内は、三日目の日が暮れてしまつてもついに屋敷へは帰りません。

伯耆の安綱と称せしかの名刀もまた、幸内と共にその行方を失つてしまいました。

この前後のこと、甲府の町うちにおりおり辻斬があります。三日か四日の間を置いて、町の端れはずに無惨むざんにも人が斬られていました。その斬り方は鮮やかというよりも酷烈こくれつなるものであります。

一刀の下もとに胴斬りどうぎにされていたのもありました。袈裟けざに両断

されていたのもありました。首だけを刎ね飛ばしたのもありました。ちようど神尾主膳の家で刀のためしのあつたその夜もまた、いなりくるわ 稻荷曲輪の御煙硝蔵ごえんしょうくらの裏に当るところで、一つの辻斬があつたことが、その翌朝になつてわかりました。

斬られたのは幸内ではありませんでした。ところの方角も幸内の帰つて行つたのとは違ひますし、ことに斬られた本人が近在の煙草屋でありましたから、直ぐに本人の家族へ沙汰があつて、これらが駈けつけて泣きの涙です。

町奉行の役人と、前日神尾の家へ集まつた師範役の小林文吾とその弟子どもも駈けつけました。

町奉行の検視の役人は、現場に立つて面かおを見合せて腕を組んで、

「たしかに物取りの仕業しわざではない」

「勿論のこと。これでこの一月ばかりの間に四つの辻斬もちろん」

もう一人が、やつぱり浮かない面をして、現場を今更のよう
に見廻すのであります。

「それがみんな同じ手」

と、もう一人が言いました。

「非常な斬り方である、これはどうも……」

と言つて三人の役人が一度に小林師範役に眼を着けました。

彼等にはなんとうながも解釈がしきれないから、それで小林の意見を促すような眼つきであります。

「これだけに斬る者は……」

と言つて、小林も頭を捻ひねつて思案に余るようでありました。

「刀が非常な大業物おおわざものであるか、さもなければ、人が非常な斬り手である」

小林は今その屍骸の斬り口を検査して見て、舌を捲いているところでありました。この一カ月来、これで四度辻斬があつたのに、そのうち三度まで小林は立会っていました。

先日神尾の屋敷で試し物があつたのも、一つはこの辻斬があつたから、それに刺戟されたものであります。

一人二人の間は話の種であつたけれども、四人目となつては町の人の戦慄せんりつであります。町の人の戦慄と共に、役向の責任でありました。そうしてこの小林文吾にとつては、まさに剣道の面目といふことになりそうです。

「もし当地に住居致す者にてこれだけの手腕うでのある人あらば、拙者に心当りのないはずはないが……しかしその見当がつかぬ。察するところ、他国の浪人がいずれにか隠れていて、夜な夜な狼藉ろうぜきを働くのではないかと思う」

「ともかくも、今夜より一層警戒を嚴重に致さねばならぬ」

小林文吾は自宅へ帰つていろいろと考え込んでしまいました。

小林は小野派一刀流を本もととして田宮流の居合いあい、神道流の槍なども得意としている人であります。彼はこの斬り手がたしかに、城内にある勤番武士のうちの誰かであると思当をつけてしまつていました。城下及び領内にも腕の利きいた人がないことはない、百姓町人の間にさえ相当に出来る人を知っているけれども、それらの人にこんな荒っぽい芸当ができるものではない。その斬り方の酷烈なことを見ても、とうてい普通の人情を備えたものにはできない仕業しわざである。さて城内の勤番武士の間にその人ありとすればそれは誰だろう。小林はその見当に思い惑まどうています。

城内の勤番のなかに覚えのある者で、一応小林と手を合せな

い者はないはずであります。それであるのに見当がつかない。思い惑うているそこへ、

「先生」

と言つて現われたのは、先刻、辻斬の立会に連れて行つた岡村という高弟でありました。

「おお岡村氏」

「先刻は失礼を致しました」

「いや先刻は大儀でござつた」

「先生、それにしても腹が立ちまするな」

岡村は何か余憤があるらしく、

「先生、拙者の考えには、この辻斬はたしかに城内の勤番の武士のうちにあると、こう見当をつけましたが如何いかがでござりまする」
「それぞれ、拙者もそう思っているが、その勤番のうちで、そ

れでは誰と目星をつけ様がない、それで考えが行詰つてしまつてゐる」

「左様、城内の侍ならば、先生と我々との間に大抵の品定めがきまるのでござりまする、それで拙者もいろいろと考えてみましたが、とうとう一つ考え当りました」

「それは誰じゃ」

「先生、意外な人でござりまするよ、それこそは」

「遠慮なく言つて見給え」

「そんなら申してみましよう。しかし先生、城内で我々が、まだその腕前を海とも山とも見当のつけられないものがたった一人あるはずでございます、先生もひとつ、それをお考え下さいまし」

「左様な人は……今もつくづくとそれを考えて、考え抜いたけ

れど、左様な人は一人もないのじゃ」

「それがあるから不思議でございます」

「誰じゃ、言つて見給え」

「それは先生、あの今度御新任になつた御支配の駒井能登守でございます」

「ナニ、駒井能登守殿？」

小林もさすがにその突飛とつびな推察に驚かされたようです。しかし、そう言われてみると、城内でしかるべき人として、海のものとも山のものとも知れないのは新任の駒井能登守一人だけです。これを突飛として見れば突飛だが、注意を以て観察すればその人が、一廉ひとかどの注意人物でない限りはありません。

「しかし先生、これには寸分も証拠とはござりませぬ、先生なればこそ、斯かよう様なことを申し上げるので、余人へは冗談じょうだんにも

申されたことではござりませぬ。それを確かめるために、私は今夜からひとつ、忍びを実地に稽古してみとうござりまするが如何いかでござりましょう、先生の御意見は」

「なるほど」

「今夜ということに限らず、これから一心にあの駒井能登守殿の拳動をいちいち探査してみとうござりまする、いかがなもの
で」

「なるほど」

「そうしてよいよ、これはという動きの取れぬところを押えたら、相手が相手だけに妙ではござりませんか」

「うむ、面白い」

ここに至つて小林師範役は膝を打ちました。岡村も喜んで、
「では先生も御賛成下さいますな」

「いかにも。やつて見給え。しかし相手が相手だけに用心も一層じゃ」

その後、岡村は道場へはあまり姿を見せないようになりました。その当時暫らくは辻斬の噂がありませんでした。岡村はまだなんとも報告を齎もたらさなかつたけれど、こうして岡村が警戒するのために、辻斬もそれを憚はばかって当分遠慮をしているのではないかと、小林師範役は心の中で岡村を頼もしがって、そのうち何か面白い報告を齎すだろうと楽しみにしていました。

ところが、それから六日目の朝つばら、小林師範役がまだ床を離れたばかりの時分に、あわただしく一人の門弟が、

「先生、先生、先生、大変でござりまする、大変」

小林はその慌あわただしさに驚かされました。

「先生、先生、また辻斬がございました、また辻斬が……斬ら

れたのは岡村氏でございます、岡村氏が松蔭御門まつかげごもんの跡で袈裟けさに斬られて死んでおりまする」

「ナニ、岡村が？……」

小林文吾も仰天ぎょうてんしないわけにはゆきませぬ。押取刀おつとりがたなでその場へ駆けつけて見ると、岡村は左の肩から右の肋あばらを斜めに断たれて、二つになつて無残むざんの最期さいご。

小林文吾はあまりのことに、暫らく口も利けないくらいであります。

七

その晩、一間のうちでしきりに刀を拭ぬぐうているのは机竜之助であります。

竜之助は盲目めくらになつてゐるけれども、その一間には丸い朱塗あんどんの行燈が立てられて、燈火あかりがぼんやりと光つています。

その燈火の下で竜之助は、秋の水の流れるような刀を拭うておりました。

刀は幾本も幾本もあつて、白鞘しろがさやのものや拵こしらえのついたものが、竜之助の左の側に積み重ねるようになつてあるのを、右へ取つては拭いをかけて置き換へてゐるようです。

ある時はまたそれを行燈の下で二三度振つてみました。ある時はまたその刃切れを調べるようにしていました。

刀は、いずれも二尺以上のものばかりです。こうして四本かぞえて五本目に抜いた刀は、二尺三寸余りあるように見えます。

「ははあ、これだな、これが手柄山正繁てがらやままさしげだ」

と呟つぶやいて竜之助は、それを自分の右の頬ほに当て、刃やを鬢びんの毛に

触れるようにしていました。

盲目めくらであつた竜之助には、その刀の肌を見ることができませ
ん。鑑にえも匂いもそれと見て取ることのできるはずがございませ
ん。けれども、

「これは斬れそうだ」

と言いました。刃を上にして膝へ載せてから研石みがきいしを取つて竜之
助は、静かにその刃の上を斜めに摩こすりはじめました。竜之助は、
いまこの刀の寝刃ねたばを合せはじめたものであります。刀の寝刃を
合せるには、きつと近いうちにその刀の実用が予期される。明
日は人を斬るべき今宵という時に、刀の寝刃が合せられるはず
のものであります。

それですから、刀の寝刃を合せる時には大概の勇士でも手が
震うものであります。心が戦おのくものであります。それは怯おくれ

たわけではないけれども、明日の決心を思う時は、血肉がじつとしてはおられないのであります。それはそうあるべきはずです。しかるにこの人は平気で寝刃を合せています。蒼白い面の色、例の切れの長い眼の縁ふちには、十津川で受けた煙硝のあとがこころもち残っているけれども、伏目ふしめになつてゐる時には、それが盲目とは思われぬほどに昔の面影おもかげを伝えていました。その面の色はいつ見ても沈んでゐる。

音無しの構えに取つた時に見る、真珠を水の底に沈めたような眼の光こそ今は見ることができませんけれど、その代りに蒼白い面の表一面に漲みなぎるような沈痛の色、それは白日の下で見るとよりは燈火の影で見た時に、蒼涼そうりょうとして人の毛骨もうこつを寒からしむるものがあります。

今、ようやく寝刃ねたばを合せ終つたのは二尺三寸、手柄山正繁の

一刀でありました。この刀を斬れるようにして、それから竜之助は何をするつもりであるか知れないけれども、いま竜之助が座を占めて刀調べをしているこの一間、そもそもこの屋敷、それは説明しておく必要がありますでしょう。

この屋敷は甲府を離ること半里、躑躅つづじヶ崎さきの古城跡にある荒れた屋敷であります。そうしてこの屋敷の持主は神尾主膳であつて、主膳は前の持主が住み荒らしたのを買い取つて、下屋敷のようにしていました。けれども主膳自らはここに来ることが甚だ稀まれであつて番人に任せておいたから、いよいよ屋敷は荒れていました。それをこの頃になつて、主とも客ともつかぬ者が一人出来ました。それがすなわちこの机竜之助であります。

神尾主膳が何故に机竜之助をここへ置いたかということは、まだ疑問でありましたけれど、ここへ置かれた机竜之助は、囚人めしうど

でも監禁の相すがたでもありません。

竜之助をここへ移したものが神尾主膳でありとすれば、今こ
こへ刀をあてがっておくその人も神尾主膳でなければならぬ。

神尾主膳の名を騙かたつて奈良田の奥へ甲州金を取りに行つた偽物にせもの
を殺して、その駕籠かごで神尾の邸へ乗り込んだはずの竜之助を、
神尾主膳が保護するような形式を取つていことが、不思議で
あるといえば不思議であります。

竜之助がこの古屋敷に来てから、もうかなりの時がたちまし
たけれど、まだ一回も外へ出たのを見たものがありません。幾
間も幾間もある屋敷の、いずれの間に住んでいるのであるかさ
えもよくわかりませんでした。しかし、夜になると、屋敷の番
人をしている男が食物を運ぶのと燈火あかりをつけに来ることによつ
て、そこに人がいることがわかりました。

また庭の幾所に巻藁まきわらが両断されて転がっていることによつて、この家に住む人が試し物をするのだということが想像できるのであります。

ここに置かれた机竜之助が刀調べをしていることも、その調べた刀によつて巻藁の類を試していることも、ひまつぶしとしてはそうありそうなことであります。寝刃ねたばを合せていることも、巻藁を切るためであつたかと思えば、別段に凄いことではありません。

そこで寝刃を合せおわ了つた竜之助が、手柄山正繁の一刀を取り直した時に、広い座敷、およそ二十畳も敷けるこの一間の片隅にあつた古びた長持の蓋ふたがガタといつて動きました。

その音で竜之助は、刀を持ったまま長持の方を向きましました。竜之助が長持の方を向いた時に、長持の蓋がまた続けざまにガ

タガタと二つばかり動きましました。三つ目には、もつと烈しい音で、下から力を極めて何か持ち上げるような音で長持が動きましました。

屹きつとそれを見つめていた竜之助は、

「騒ぐな、騒いだとて時が来ねば許しはしない」

と長持の蓋に向つてこう言いました。その様、何か心得ているらしく見えます。しかし動きはじめた長持は、竜之助のこの声を聞いて静まることなく、かえつて烈しい音を続けざまに中から立てて、それに相答うるような有様でありましたが、敢あえて一言も人の言ことの葉はとしてはその中から洩れて来るものではありません。

「おとなしうしておれ、騒ぐとかえつてためにならぬ」

竜之助は叱るように、また教えるように、或いは嚇おどすように

こう言いました。ところが、その声を聞くと、いや増しに長持が動きました。動くというよりは寧ろ、長持そのものが荒れ出したように見えしました。もしこの長持の中に人があるならば、こんなに荒れ出す先に、許せとか助けよとか、哀れみを請うべきはずであるのに、そうでなくて、ただただ必死に荒れてのみいるのであります。その荒れる烈しさをこちらから想像すれば、それはかなり力のある男のする業であると、誰もそう思わないわけにはゆきません。

口では叱るように、教えるように、または嚇すように騒ぐなと言ったけれど、その態度は冷然たるもので、いよいよ動き荒れ出した長持の蓋も箱も中から裂けてしまひそうになつてきた時、竜之助は立とうとも動こうともしませんで、やはり冷然として、その刀を鞘に納めてしまひました。その途端に長持の

いずれの部分かが、メリメリと裂けるような音がしたかと思うと、中からもがき出したのは一人の男。

それはちようど、紺屋こんやの藍瓶あいがめの中へ落ちた者が、あわてふためいて瓶から這はい上るような形であります。面かおも着物も真黒でありました。

古い長持であつたから、それで錠前じようまえも刃切はねきれたものであろうけれど、それにしても中からそれを刃切るのは容易な力ではありません。渾身こんしんの力を絞つてやつと蓋を跳上げて、箱の外へもがき出した一人の男は面も着物も、そっくりと紺屋の藍瓶へ漬けておいたように真黒くなっていました。そのもがき出す身ぶりによつて見れば、両手を後ろへ廻して縛られた上に、両足をまた一つに絡からげてこの中へ投げ込まれていたものと見えます。

竜之助は今しも鞘へ納めた手柄山正繁の刀を膝元へ引きつけ

たまままで、ただそちらの方を見て坐っているばかりでありました。この刀は白鞘しらさやの刀ではありません。それは神尾が差しても竜之助が差しても恥かしからぬほどの拵えのある刀でありました。その刀をここもち居合に取つて、行燈の方向を少し避けるようにしたのは、ここに引寄せて斬つて捨てようとの心構えに見えました。

真黒になつて手足を縛られた人間が、やつと立ち上つた形は、大きな蠼螋いもりが天上するような形であります。手足こそ縛られているけれども、いつこいづこう猿轡さるづわを箝はめられた模様もないのに、口を利かないのはなぜだろう。なんとも言わないで、蠼螋いもりの天上するような形をしてやつと長持をもがき出した黒い人影は、人魚の児が這い出したようにして畳の上をのたくつて、竜之助の方へと寄つて来るのであります。

のたりのたつてその男は、ついに竜之助の膝のところまで来ると、その膝を枕にするようにして竜之助の面かおを打仰ぎました。

「叱しつ！」

竜之助は左の手でそれを払い退けると、その男は執念しゅうねく再び竜之助の膝にのたりつくのであります。

「うるさい」

竜之助は再びそれを払い退けました。払い退けられて男は三たび竜之助の膝にのたりつきました。その口を慌あわたたしく動かして、咽喉のどくび首おきが箴おさのように上下するとところを見れば、これは何か言わんとして言えないのでした。訴えんとして訴えられないものがありました。

突き放され、突き放され、またのたりつく有様は他目よそめには滑稽こっけいでもあるけれども、その当人は名状し難い苦しみにもがいてい

るのです。如何せん机竜之助は、それを滑稽として見ようにも、また苦悶の極みとして見ようにも、どちらにしても見て取るこ
とができない人でありました。

しかしながら、机竜之助の両眼が暗くて、その人の何者であるやを見て取ることができないにしても、たとえばささやかながら行燈あんどんの火がある以上は、面かおも着物も真黒になつてはいるけれど、見知った者には間違ひなく、それは馬大尽の雇人の幸内であるといふことがわかるのであります。

これは馬大尽の家の幸内でありました。伯耆ほうぎの安綱の刀を持つて出て行方ゆくえ知れずになつた幸内が、今ここにこんな目にあわされていゝことを誰が知ろう。幸内はそれを今、神か仏か知らなければいゝけれども居合せた机竜之助に向つて訴えようとするものらしいが、どうしても口が利けないらしい。

「神尾殿が来てなんとかするまで、もとのところで窮命しておれよ」

竜之助は、やはり片手でさぐつて、のたり廻る幸内の襟えりがみ髪をむぞうさ無造作に掴んで、部屋の隅へ突き飛ばしてしまいました。

幸内を振り飛ばした机竜之助は、やがて手柄山正繁の一刀を腰に差して立ち上りました。

振り飛ばされた幸内は、長持の隅のところへ投げ倒されたなりで、今度は動くことをしませんでした。そうしておいて竜之助は、懐中から宗十郎頭巾そうじゅうろううずきんを出して冠かぶりました。頭巾を冠かぶつてしまつてから、座敷の隅をさぐるとそこに杖が立てかけてありました。その杖を手に取つて、行燈の方へ静かに歩み寄つて、その火を消そうとすると、廊下に人の足音がしました。それで竜之助は行燈を覗のぞいたような形のまま、その足音に耳を傾け

ました。

足音は廊下を伝つてこの座敷へ来るのであります。

「机氏、机氏」

と言つて竜之助を呼びました。

「おお、主膳殿か」

竜之助はそれを知つて、燈火を吹き消すことをやめて、冠かぶつていた頭巾を取つて懐中へ押隠すように入れてしまいました。そこへ入つて来たのは神尾主膳でありました。

主膳は片手に長い箱を抱えて、

「竜之助殿、貴殿に見せたい品がある、それでワザワザやつて来た」

「それはそれは」

主膳は長い箱を目の前へ取り直して、

「いつぞや噂をした伯耆の安綱の刀が手に入った」

「ははあ、安綱がお手に入ったか、それは珍重ちんちよう」

主膳が包みを解いて箱の中から出した袋入りの白鞘は、前日
試し物のあつた日から、幸内と共に行方不明になつた馬大尽の
家に伝わる宝刀であります。

しばらくして神尾主膳は、燈下でその安綱の鞘を払つて竜之
助の前に突き出して、

「二尺四寸、大湾おおのたれで鉞にえと匂においの奥床おくゆかしいこと、とうてい言語
には述べ尽されぬ」

と言いました。

「篤とくと拝見したいものだが、見る事ができぬ」
と言つて竜之助は笑いました。

「ともかくも手に取つて見給え」

主膳はその刀を持ち添えるようにして、竜之助に手渡ししました。

「なるほど」

竜之助は伯耆の安綱の刀を手を取って、持ち試みていましたが、

「安綱といえは古刀中の古刀、誰もその位を争うものはないのだが、さて実力はどれほどのものか知らん」

と言つて嘯くうそぶように見えました。

「竜之助殿、貴殿ひとつ試してみる気はないか」

「この安綱を？」

「左様」

安綱を試してみると言われて、竜之助は首を横に振りしました。「いかに名刀なりとて、千年もたつては隠居同様、ただ名物と

して奉つて置くが無事であろう」

「たとえ千年二千年たとうが、精が脱けるようでは名刀の値打はない、この肌を見給え、この地鉄を見給え、昨日湯加減をしたような若やかさ」

「拙者には名刀といわず、無名刀といわず、手に合うたものがよろしい」

「それはそうかもしれぬ、しかし、安綱ほどの刀を試して、千年からの極めを破るも面白いではないか。この刀をもつて物を斬つた話、古くは源頼光の童子切と、近代では長曾我部元親が何とやらしたという話、そのほかは畏れかしこんで神棚へ祀るほかには能事がない。事実、切れ味はどんなものか拙者も知らぬ、世間の奴も知らぬ」

神尾主膳は机竜之助をして、伯耆の安綱と称せらるるこの名

刀を試させん底意そこいがあつて来たものと見えます。

「それはそうであるう、伯耆の安綱ともいわれる刀で犬猫も斬れまいし、滅多どたんに土壇まきわらや巻藁まきわらをやつても物笑い、それこそ宝として飾つて置くが無事だわい」

竜之助は寧ろ安綱を冷笑するむじような言葉つきでありました。

「折れても承知、その刀の真の切れ味が知りたい」と神尾は言いました。

「折れて承知ならば、一番斬つてみようか」

竜之助はこう言いました。

「頼む」

神尾は透すかさずこう言いました。

竜之助は打返して、その刀を振り試みていました。

「よし、試してみよう」

竜之助はやはり巻藁か土壇を切るように容易く請合たやすつてしまうけあいました。

「それでは、机氏」

と言つて、主膳は伯耆の安綱を竜之助に預けて帰ろうとします。

「もう、お帰りか」

「このごろは甲府の市中が物騒でな、我々とても油断しては歩
けぬ」

「物騒とは？」

「辻斬はが流行やるのじゃ」

「辻斬が？」

竜之助はこの時、苦笑いをしました。主膳は刀を差しながら、
「昨夜も、小林と申す剣道の師範役の高弟が斬られたのじゃ、
斬った奴は何者だともまだわからぬ、奉行の手でもわからぬし、

城内の者にも心当りが無い、しかし斬り手は非常な腕だ、それで甲府の上下、身の毛を慄よだ立てているが、困ったものじゃ

「うむ」

「もし貴殿の眼でも見えたなら、こういう時には、その曲者くせものの眼に物見せてやろうものを、あたら英雄も目無鳥めなしどりでは悲しいことじゃのう」

「目が見えたら辻斬をして歩く方へ廻るかも知れぬ」

「ははは、そうありそうなことじゃ」

神尾主膳はなにげなく笑いましたが、この時はじめて気のついたように、

「竜之助殿、あの長持の中の物、あれを貴殿にお任せ申そう、安綱の切れ味、ことによったら、あれで試して御覧あれ」

「よろしい」

主膳は別に長持へ近く寄つてそれを改めてみようともしませんでした。竜之助もまた長持から怪しい者が出て来て、自分の膝へ縋すがりついたということを語るでもありませんでした。その長持から出た怪しの者も、この時ははやジタバタするではありません。

こうして神尾主膳はこの古屋敷を出て行きました。甲府から半里、駕籠にも乗物にも乗らずに来て、玄関には草履取と提灯持兼帯の男が一人待っているばかりでした。

躑躅つづじヶ崎さきの古城は武田家の居城きよじょうのあつたところ。三面には岡

があるけれど、城は平城ひらしろ、門の跡や、廓くわくわのあと、富士見御殿の

あつた台の下には大きな石がある。そのあたりは松の木や荊いばらが

生い茂つている。神尾主膳が本通りを甲府へ帰りついた時分に、

大泉寺の鐘が九ツを打ちました。その時分にこの古城のところ

を机竜之助が歩いていました。やはり宗十郎頭巾を冠かぶつて杖を持って刀を差している。その行先はいずれであるか知らないけれども、向つて行くところは、やはり甲府の方面であります。

八

その晩、甲府八幡宮の茶所で大欠伸おおあくびをしているのは宇治山田の米友であります。

土間には炭火がカンカンと熾おこつている。接待の大茶釜が湯気を吹いて盛んに沸いている。そこで米友は、こちらの畳の上にあぐらあぐら胡坐をかいて遠慮なく大欠伸をしています。

下には浅黄色あさぎいろの短い着物を着て、上へ白丁はくちようを引っかけ、大欠伸をした米友は、またきよ、とんとして大茶釜の光るのと、そ

れから立ちのぼる湯気と、カンカン熾おこつている炭火とをながめていましたが、

「どっこいしょ、燈籠とうろうのあかりを見て来なくちやならねえ」

と言つてそこを立ちました。立つ時に米友は億劫おっくうそうに烏帽子えぼしを冠かぶつて、その紐を横つちよの方で結んで、銅の油差を片手に、低い床几しょうぎを片手に持つて、草履をつつかけて外へ出ましたのです。

「なんだか知らねえが、今夜はこの八幡様へで、えだらぼつちが来るそうだから、それで燈火あかりを消しちやあならねえのだ。で、えだらぼつち、ちというのは、どんな奴だか、これも俺おいらは知らねえが、恐ろしくでかい奴だという話だ。そので、えだらぼつちが、この八幡へ喧嘩をしかけに来るから、それで八幡様の前を明るくしておけという神主様の仰せだ。だから俺らはその仰せ通り今夜

はずのぼん
は不寝番で、お燈明へ油を差して歩くんだ」

油差と床几を手に持って外へ出た米友が、こんなことを言いました。そうして社の鳥居のところから始めて幾つもある木の燈籠や、石の燈籠をいちいち見て歩いて、消えそうなやつへは油を差して歩きました。歩くといつても、やはり米友は跛足びっこです。それに背が低いからいちいち床几を下へ置いてその上へのつて、それから油を差して歩きます。

境内を残る隈くまなく見廻つて、油を差すべきものには差し終つてから米友は、また茶所へ帰つて来ました。そうして熱いお茶を一杯いれて呑んでから、烏帽子えぼしを取つて叩きつけるように抛ほうり出して、また前のところへ胡坐あぐらをかいて、前のようにぼんやりとして、接待の茶釜の光るのと炭火のカンカンしているのをながめていましたが、程経てまた大欠伸おおあくびをはじめてしまいまし

た。

「眠つてえな」

と言つて眼を擦りながら、

「はははは、笑あせやがら」

なんと思つたか米友はカラカラと笑い出して、

「で、え、だら、ぼ、つ、ち、なんというものは見たことも聞いたこともねえんだ、で、え、だら、ぼ、つ、ちが来たからつたつても、なにもそんなに驚くことはあるめえじゃねえか」

と言いました。何か米友はそので、え、だら、ぼ、つ、ちについて腑ふに落ちないことがあるようです。

「そので、え、だら、ぼ、つ、ちが喧嘩に来るから、それを怖がつているような八幡様じゃあ、八幡様の有難味が薄いや、で、え、だら、ぼ、つ、ちが来たら来たように、俺らがなんとかひとつ掛合つてみてや

ろうじやねえか」

米友はしきりにで、えだらぼつちのことを言つて当あてのない臂ひじを張つてみましたが、それも暫くすると、眠氣に負けたらしく、羽目はめへ寄りかかつてコクリコクリと漕こぎ出してしまいました。

「あ、眠つちやいけねえんだ」

茶釜を溢あふれた沸湯にえゆが、炭火の上に落ちてチューと言つた音で米友は眼を醒さました。すがにまた漕こぎはじめてしまいました。

やや暫く居眠りをしていた米友が、

「あ、また眠つちまった」

と言つて二度目に眼をさました時は、何か気にかかるようなものがあるような様子です。

「はてな、今、足音がした、たしかにここで足音がしたに違え

ねえんだ」

と言つて、米友は眠い目を睜みはつて鳥居の方から外を見ました。

「誰だい、誰か来たのかい」

と咎とが立てをしたけれど、外は闇でよくわかりません。燈籠の火影ほかげ

の届くところには何者も見えませんでしたけれど、感心なことに宇治山田の米友は、居眠りをして、その足音を聞き洩らすような油断がありません。

「まさか、で、えだらば、つちじゃあるめえな」

と言つて座右を顧みた時に、そこに六尺の手槍がありました。

「兄い、なかなか寒いじゃねえか」

気軽に茶所へ入つて来たのは、で、えだらば、つちでもなければ、八幡様の廻し者でもないようです。竹の笠を被つて紺看板こんかんばんを着て、中身一尺七八寸ぐらいの脇差を一本差して、貧乏徳利を一

つ提げたお仲間体の男でありました。

「うむ、寒い」

米友は案外な面かおをして仲間体の男を見ますと、その仲間体の

男は、心安立こころやすだてにズカズカと火の傍へ寄つて来て、

「兄い、済まねえがお茶を一杯振舞つてくんねえ」

と言いました。

「いくらでも飲みねえ」

仲間体の男は貧乏徳利を土間へ置いて、大土瓶から熱いお茶を注いで飲みました。お茶を飲むところを笠の下から見ると、この仲間体の男は、折助おりすけにしては惜しいほどの人柄に見えました。

「どこへ行つたんだい、もう晩おそいよ」

と米友は咎立とがめだてをするような口ぶりであります。

「ナニ、部屋からの帰りなんだ」

と仲間体の男はなにげなき体ていで返事をして、お茶を飲んでしま
うと懐中からかます吠を取り出して、炭火で火をつけてなたまめ鈍豆でスパス
パとやり出しました。

「兄い、不寝番ねずのぼんかい、御苦労だな」

と言いました。

「ははは、不寝番だよ、今夜はでえだらぼつちが来るとい
うから、それで寝られねえんだよ」

「ははあ、なるほど」

と言つて仲間体の男はうなず頷きました。

「でえだらぼつちがこの八幡様へ喧嘩をしかけに来るんだそ
うだ、それで八幡様のお庭を明るくしておくと神主様の言いつけ
だ、だからこうして不寝番をして、時々燈籠へ油を差して歩く

んだ」

米友はワザワザ申しわけのように言っていると、

「なるほど、それは御苦労さまだ、油を差すのはいいが、油を売つちやいけねえよ」

「ばかにしてやがら、油なんぞを売るものか」

「それでも今、コクリコクリとやっていたじゃあねえか、あんなときにでえだらぼつちがやって来たらどうする」

「そりゃあ、コクリコクリやっていたつて、了簡りようけんは眠つちやあ
いねえんだ、眼は眠つても心は眠らねえから、誰がどこへ来た
ということもちやんとわかる」

「えらい」

と言つて米友を煽おだてた仲間体の男は、いい気になつて、米友が
いま持つて歩いた床几しょうぎの上へ腰を卸おろしてしまい、

「兄い、睡氣しめざましに一口湿しめしてみちやどうだ、いい酒だぜ」
と言つて、傍へ置いた貧之徳利を取り上げて少しく振つて試み、それから懐中へ手を入れて経木皮包きようぎがわづつみを一箇取り出しましたが、こんなことをしている間にも、どうやら外の通りを気にかけている様子であります。この男は仲間体に見えたけれども仲間でないことは、その人柄の示す通りであつたが、事実もやはりその通り、これは師範役の小林文吾の変装でありました。

小林文吾は言葉も身ぶりも、やつぱり仲間そっくりで、徳利を振つてみて、懐中から経木皮包を取り出しました。

「兄い、うめえ肴さかながあるから一口湿しめしてみてはどうだい」

「俺おいらは酒は飲めねんだ」

と米友は断ことわりました。

「そんなことを言わねえで、一杯つきあつたらどうだい」

「酒は飲めねえんだ」

「そうかい、そりゃあせつかくだな」

と小林文吾が、多少気の毒そうに徳利を引込めたから、米友もそれに好意を表する気になりました。

「俺らは飲めねえけれど、お前、そこで飲むなら飲みねえ。ナニ構わねえよ、神様の前だつてお前。神様だつてお神酒みきをあがるんだからな」

「そうかい、それじゃ済まねえが、一杯やらしてもらおうとしよう」

小林文吾は米友の好意を得て、また徳利を引き出しました。その徳利から、さきに借りた茶碗へ冷ひやで一杯ついで、それを一口飲んでから茶碗を畳の上へ置いて、徳利を炭火の端へ突込んで地じ爛かんをするように仕掛けました。

「俺が一人で飲んで、お前に見せておいては済まねえ、酒がいけなければ肴さかなを御馳走しようじゃねえか。この通り、結構な肴を持って来ているんだぜ、目刺めざしだよ、目刺を大相場で買い込んで来たんだ。目刺だからと言つて、ばかにしちやいけねえ、今時いまとき、甲州でこんなうめえ目刺が食えるわけのものじゃねえ、ほかの国ならばどんな魚でも食えるんだけど、この甲州という山国へ来ては、たとえ、目刺にしてみたところが容易なもんじゃねえんだ、昔信玄公が北条と軍いくさをした時分によ、小田原の方から塩を送らなかつたものだ、これには信玄公も困つたね、海のねえ国で、塩の手をバツタリ留められてしまつたんじゃあやりきれねえ、それを越後の謙信という大将が聞いてよ、おれが信玄と軍をするのは、弓矢の争いで塩の喧嘩じゃねえ、土や城は一寸もやれねえが、北国の塩でよければいくらでもやると言つて、

度胸を見せたのは名高え話だ。だからお前、いま目刺を持つて来るにしたところで、駿河するがの国から呼ぶんだぜ。これから駿河の海辺へ出るのには三十里からあるんだ、その間を生肴なまぢかなが通う時は半日一晩で甲府へ着くから大したものじゃねえか。その半日一晩で着いた生肴の方はなかなか俺たちの口にゃあ入らねえ」といつて小林文吾は、経木皮包を開いて火箸を横にしてそれを炙あぶろうとすると、見ていた米友が、

「おつと待つてくれ、酒はいいけれど肴の方はよしてもらいてえ、酒は神様も召上るけれど、まだ目刺を八幡様が召上ったという話は聞かねえからな」

「なるほど」

小林は米友の理窟に伏して、強いて目刺を焼こうともしません。

「このごろは世間が騒がしいからな」

ややあつて小林は、何ともつかずにこんなことを言いました。

「ははは、世間が騒がしいというのは、あの辻斬のこつたろう」
「うむ」

米友が存外平気なのを見て、小林は眼を丸くしました。

「十日ばかり前の晩にこの松山の向うで一人殺やられたんだ、そいつが殺られた時は俺らは、まだこの八幡様へ奉公に来ていなかったんだ。この辻斬というやつは甲府に限ったことはねえんだ、江戸へ行つてみねえ、このごろはあつちこつちでずいぶん流行はつていらあ」

「そんなものに流行られてはたまらねえ」

と小林は額を押えました。

「甲府へはまだ流行つて来ねえけれども、江戸でも天誅てんちゆうという

やつが流行り出してるのだ。天誅というのは、金持やなんかで太えふてことをした奴を踏んごんで行つて斬つちまつて、その首を曝さらしたりなんかするんだ、なかには前以て高札を立てて脅おどしといて斬る奴なんぞもあるんだ。なんでも薩摩の奴がいけねえんだそうだ、薩摩つぼうが天誅をやりやがるんだ。ナーニ、名前は天誅でその実は泥棒をする奴があるんだ、だから天誅じゃねえ、泥誅どどなんだ。俺らが本所に留守番を頼まれていた時分に、その泥誅どどを脅おどしてやつたのはいい心持だった」

米友の気焰は、少しく小林の注意を呼び起したらしく、「俺も久しいこと江戸へ行つて見ねえが、江戸の市中もそんなに物騒なのかい」

「そうさ」

米友はここで江戸えど通になることに、相応の誇りを感じたもの

らしく、

「江戸へ行つて見ねえ、つまり徳川の政が末なんだね」

「なるほど」

「何しろ公方様のお膝元で天誅や辻斬がやたらにあつて、それをお前、役人が滅多に手出しができねえんだからな。それでまた片一方には貧窮組というのがあるんだ」

「なるほど」

「貧窮組というのは、貧乏人の寄集りなんだ、貧乏でキュウキュウ言つてるからそれで貧窮組というんだなんて、貧乏を見え、して、党を組んで、旗を立てて、車を曳いて押歩いてる」

「なるほど」

「それに比べりゃあ、甲府なんぞは無事なものさ、一人や二人の辻斬は、どうも仕方がなからうぜ」

「ところが一人や二人じゃねえんだ……」

小林はそれに付け加えて何か言おうとした時に、十日ほど前の晩に人が斬られたという松林の方で、

「鍋や——き、うどん」

自慢の声が長く引いて聞えて来ました。

「来たな、鍋焼が来たぞ」

米友はどうやらその鍋焼うどんを待ち構えているらしくあります。

「鍋や——き……」

二度目に聞えた時に、鍋や——きだけで止まってしまいました。うど——ん、という声を続けるところで急に咽喉のどが塞ふさがつてしまつたらしいから、せつかくの余韻よゐんが圧殺おしころされたような具合であります。それと同時にガチャンピシンドタンという大騒ぎ、

どんぶり
井が飛ぶ、小鉢が躍る、箸が降る、汁とダシの洪水。おおみず 屋台もろ
ともにこの茶所へ転げ込んで、

「ウ——」

と唸つたのは鍋焼鯉鮎屋なべやぎうどんやの老爺おやじであります。

「どうした」

小林文吾は、いま転げ込んだ鍋焼鯉鮎を引き起して、忙せわしく
尋ねました。

「そ、そ、そこで斬られた——」

鍋焼鯉鮎は、股慄こりつしながら、やっとそれだけ言いました。斬ら
れたとは言うけれど、斬られている様子はない。単に脅おどされた
ものか、或いは他の斬られたのを見て、自分が斬られたと思っ
たのか。小林は脇差の鯉口こいぐちを切りながら、外の闇へ飛んで出ま
した。

「爺さん、しつかりしなくちやいけねえ」

そのあとで米友が鍋焼鯉鮓の介抱かいほうに廻りました。

鍋焼鯉鮓は、やつと回復したけれども、まだ生きた空はありません。

「いつたい、こりやどうしたんだい」

と言つて尋ねてみましたけれど、その返事がいつこう纏まとまりがありません。ただ、鍋焼鯉鮓なべやきうどんをお客に喰わせていると、松の蔭

から黒い人影が現われて、そのお客もひっくり返つたが自分も無暗むやみにここへ逃げ込んだというだけの要領でありました。その

お客がどんな人であつたか、またその物蔭から出た黒い人影が、どんな形であつたか、そんなことはまるつきり要領を得ないから、米友は笑止おかしがつて鍋焼鯉鮓に力をつけてやり、お茶を飲ませたり、壊こわれた道具を片附けたりしてやりました。鍋焼鯉鮓は、

まだ齒の根も合わないで、慄ふるえながら始末をしているところへ、
「ああ、危ねえ、危ねえ」

と言いながら、またもそこへ入つて来たのは風合羽かざがつばを着た旅の
男。

「兄さん、すんでのことに、命拾いをして来たよ」
笠を取つたその人は七兵衛でありました。

「やあ、お前様はさいぜんのお客様」

と鍋焼餛飩が叫びました。

「爺とっさん、飛んだ迷惑をかけちまつた、それでもまあ、おたが
いに命拾いをしてよかつたね」

と言つて七兵衛は鍋焼うどんを慰めました。

「でもまあ、命拾いをしたにはしましましたがねえ」

と鍋焼餛飩あきらは諦めたような、諦められないような返事をして、

恨めしそうに壊れた商売道具を見えています。

「商売道具がこわれたね、爺さん、俺が立替えるよ」

七兵衛はかなり重味のある財布を首から外して、鍋焼うどんの屋台の上へ投げ出しました。

「こんなにいただいちやあ、こんなにいただいちやあ済みませんねえ」

と言つて鍋焼饅頭は恐縮してしまいました。それには拘わらず七兵衛は上り端へ腰をかけて、

「やれやれ、こうして俺たちは命からがら逃げて来たのに、また物好きな人もあればあるもので、わざわ斬られにあとを追蒐けて行つた人があるようだが、友さん、どうだい、ひとつその槍を担いで様子を見に出かけてくれねえか」

七兵衛は米友を顧みて水を向けましたけれど、米友は苦笑い

してそれに応ずる気色けしきがありません。

九

その晩はそれで済みました。その近所にべつだん斬られた人もありませんし、鍋焼なべやきうどん餛飩も夜明けになつて無事に帰つたし、七兵衛もまた明るくなる時分には、どこへ行つたか姿が見えなくなりました。

米友は昨夜の睡眠不足があるから夜が明けると共に、担ぎ出されても知らないくらいに寝込んでしまったから、日がカンカン寝ているところの障子に当るのも御存じがありません。

米友がこうしてグツスリと寝込んでしまっている朝、この八幡宮へ珍らしい二人の参詣者がありました。二人とも同じ年頃の

女であります。そうして二人ともに藤の花の模様の対の振袖を着ておりました。それから頭と面とはこれも対の紫縮緬の女頭巾を、スツポリと被つています。

「お嬢様」

と一人の娘が言いました。

「あい」

一人の娘が頷きました。一人は慇懃であつて、一人は鷹揚であります。見たところでは頭の先から足のうらまで対の打扮でありましたけれども、これは姉妹でも友達でもなく、主従の關係にあるらしいことは、今のその挨拶の仕様でよくわかるのであります。

「ここが八幡様でございますね」

「ああ、ここが八幡様」

こう言つて二人は石段を登ります。この時はまだほかに参詣の人もありませんし、この近所を通る人も極めて稀まれです。石段といつても五六段ぐらいしかありません。苦もなく二人は登つて、二人は鳥居の中へ入つて行きました。

お宮の前へ来てから、はじめてそのうちの一人が頭巾を外はずしました。そうして現かわした面おを見ると眼のさめるほどに美しくありました。それは間あいの山やまのお君であります。お君は、こんな結構な晴着で頭髪かみも見事に結かつていました。

お宮の前へ来てお君だけが頭巾を取りましたけれど、もう一人の娘は決して頭巾を取らないのであります。頭巾を取らないで八幡様のお宮の正面まともを避けるようにして、水屋みずやの方そぞろへ漫歩あるきをしてゐるのに、お君はそれと違つて、お宮の前へ出うて恭うやうやしく拝礼うやまつしました。それからお賽銭さいせんを紙に包んで、お賽銭箱の中へ

投げ込みました。

「君ちゃん」

頭巾を取らない方の娘が呼びますと、

「はい」

お君はやはり恭しく返事をして、頭巾を取らない娘の方へ寄つて来ました。

「わたしはここに待っているから、お前だけあちらへ行つてお御籤みくじをいただき来ておくれ」

頭巾を取らない娘が言いました。

「承知しました、ではお嬢様、暫らくこれにお待ち下さいませ」
「あの、お君や、もし年を聞いたら十九で、午年うまどしの男と言うように」

「はい」

「家を出てから今日で七日目になるということや、大切な宝を持って出たということも、聞かれたら答えてもよいけれど、あまり細かくは言わないように」

「はい、よろしうございます」

「それから、わたしの家の名前だの、幸内の名前だの、わたしの名前など、尋ねられても決して言わぬように」

「^{かしこ}畏まりました」

お君は頭巾を取らない娘と、これだけの問答をして、一人だけ履物はきものを脱ぎ揃えてお宮の上へあがりました。

ほどなく、お君は一枚の紙を手に持ってお宮の中から出て来ました。

「お嬢様、お御籤みくじをいただいて参りました」

水屋のところに立って待っていた頭巾を取らない方の娘――

いちいち頭巾を取らない方の娘とことわらなくても、それはお銀様と言つてしまつた方がよいのです。お君の手に持つていたお御籤の紙がお銀様の手に渡されると、お銀様は受取つて読みました。お銀様は紫の女頭巾はほとんど眼ばかりしか出さないうように深々と被つていました。その眼をじつとお銀様がお御籤の紙上に注いで黙読しているのを、お君は傍から覗いていました。お君にはその文字は読むことができないのであります。

「お嬢様、お御籤の表は、吉でございますか、凶でございますか」

「この通り八十五番の大吉と出ていますわいな」

「大吉、それは結構でございます、この八幡様のお御籤が大吉と出ますようならば、もう占めたものでございますね」

「まあ、お聞き、大吉は凶に帰るといふこともあるから、一通

り読んでみなくては」

お銀様は小さい声で読みました。

ぼうようなんぞおそきをうれへん

望用何愁晩レ

なをもとめてやうやくやすきをう

求名漸得寧レレ

うんていつひにのぞみあり

雲梯終有望レ

きろほうえいにいる

帰路入蓬瀛二

「君ちゃん」

お銀様はお君を呼ぶのに君ちゃんと言ったり、お君と言ったり、またお君さんと言ったり、いろいろであります。

「はい」

「この文句がわかつて？」

「いいえ」

「これだけでは、わたしにもよくわからないから、この下に仮

名で書いてあるのを読んで見ましよう、望用ぼうよう何愁なんぞおそきをうれへん晩レとい
う文章の下には『のぞみ事のかなふ事のおそきをうれへず、こ
ころながくじせつをまつべしとなり』と書いてあります」

「はい」

なをもとめてやうやくやすきをう

「それから求名漸得寧レレという文章の下には『やうやくと
はしだいにといふ事也、ほまれのなをもとめ、しだいしだいに
名がたかうなり、心安くおもふやうになるべしとなり』と書い
てあります」

「まあ、しだいしだいに……」

お君はなんだか充分に呑込めないような面をしました。

うんていつひにのぞみあり

「その次に、雲梯終有望レとは、大きなのぞみごとも、すでにそ
のたよりを得たということそうな、帰路入蓬瀛きろほうえい三にということは
望みが叶かなつて帰りにほうえいは蓬瀛にといつて仙人の住むめでたい国へ行

くことそうな」

「なんにしても結構なお御籤みくじのようでございます」

「けれどもお君や、心ながくとあつたり、しだいしだいとあつてみれば、これは急のことではないらしい」

「左様でございますか」

「わたしは急であつて欲しい、一日も一刻も早くその望みが叶えて欲しい」

「わたしもそのように思いまする」

「氣長く待つていられることと、居ても立つても待つてはいられないことがあるのを、神様は御存じないかしら」

「そんなことはございません」

「でも、このことの晩きを愁えずの、心長く時節を待ての、しだいしだいに望みが叶うのと、そんなことが今のわたしに堪え

られようか、わたしはこのお御籤が怨めしい」

お銀様はどうしたのか、急に眼の色が變つて、いきなりそのお御籤の紙をたて豎に二つにピリりと裂いてしまいました。

「何をなさいます、お嬢様」

お君が、周章あわててそれを押えようとしたのは遅く、二つに引き裂いたお御籤の紙を、お銀様はクルクルと丸めて、洗水盤みたらしの中へ投げこんでしまいました。

「まあ、勿体もったいないことを」

と言つて、お君は怨めしそうに、いま投げ込まれたお御籤の紙を見つめていますと、

「お君や、帰りましよう、もうどうなつてもわたしは知らない」

お銀様はお君の手を取つて引き立てるようにし、自分が先へ立つてお宮の前の鋪石しきいしを歩きました。お銀様の挙動には、いつ

でもこんな気むずかしいことがあります。夕立の空のように急に御機嫌が變つて、人に物をやっつてしまつたり、また自分の物をおしげ惜気もなくこわしてしまつたりします。お君はよくその呼吸を心得ているけれども、この時はあまりお嬢様の我儘わがままが過ぎると思ひました。我儘というだけでは濟まない、これは罰ばちの當つたような仕業しわざと思われないわけにはゆきませんでした。大神宮のお膝元で育つたお君には、神様を粗末にすることは罰当りという觀念が強いのであります。

「お嬢様、ナゼあんなことをなさいます、せつかくのお御籤を……罰が当ります」

「何だか、わたしは知らない」

お銀様はお君を引き立てて、お宮の外へ出てしまいました。

「大吉は凶に帰る」

この時、茶所で、米友が昼寝をしていたのはどうも仕方がありません。お銀様は先に立って、

「お城を見て行こう、お城の方へ廻って見物して帰ることにしようわいな、早く」

「お嬢様、今日はこれだけでお帰りなさいませ」

「いいえ、お城を見て行きますよう」

「お城の方へおいであそばすと暇がかかって、お家で御心配になりますから」

「そんなことはかまわない、お城の方へ廻ってみたい、お前いやなら一人でお帰り」

「それではお伴ともを致しましょう」

お君はやむことを得ずして、賑かな方へとお銀様に引かれて行くのであります。その間にお君は紫縮緬の女頭巾を被り直

しました。お銀様は、いつもよりは早い足どりでお城の大手の方へ、大手の方へとめざして歩いて行きましたが、どうもお君は、それが少しずつ物狂わしいように思われて、不安の念に駆かられないわけにはゆきません。

甲府の城は平城ひらしろではあるけれど、濠ほりも深く、櫓やぐらも高く、そうして松の間から櫓と塀の白壁が見え、その後ろには遙かに高山大岳そびが聳そびえている。濠を廻まわつて二人の若い女は大手の門の前へ立ちました。

ここへ来ると、お天守台も御櫓も前に見えなかつたのが、よく見えます。

お城の大手の濠の前に立ってお銀様は、

「君ちゃん、わたしは、どうも幸内がこのお城の中にいるようにばかり思われてならない」

と言いました。

「左様でございますか」

と言つて、お君も同じくお城の方を見ていました。

「幸内は、お父様の大切なあの刀を、あたしから借りて、この御城内のどなたかへ見せに来たものに違いない、この御城内のお方でなければ、有野村の近所で、あの刀を見たいというような人があるはずはないのだから」

「それもそうでございます、御城内のどなた様へおいでなさいましたか、それがわかりさえしますれば……」

とお君の返事から、お銀様は暫く考えて、

「あの、お君や」

と少し改まったように言いました。

「はい」

「お前は、この御城内しりびとに知人しりびとがおありかえ」

「いいえ」

お君は、どうして私風情わたしふぜいが、御城内のお方になんぞと、首を横に振って眼を睜みはりました。

「おありだろう」

と言つてお銀様は、意味ありげにお君の面を見ました。

「いいえ、わたくしなんぞが」

とお君は言葉に力を入れて言いわけをしましたけれど、お銀様はそれを肯きかないで、

「お前はこの御城内にお親近ちかづきの方があるはずなのよ、お前は知らないと言うけれども、わたしはちゃんと知っている」

「お嬢様、どうしてそんなことがございましょう、わたしは他国者よそものでございいますから」

「けれどもお前、よく考えてごらん」

「どんなに考えましても」

「そう、お前、知ってるじゃないか」

「いいえ」

「まだわからないの」

「どうしてもわかりません」

「そんなら、わたしが言つて聞かせる、それいつぞや、お馬を調べにわたしの屋敷へお見えになつた、あの……」

「あ、御支配の駒井能登守様でございましたか」

「そうそう、あのお若い綺麗きれいな御支配の殿様のことよ」

「左様でございましたか、それならば、わたしはよく存じておりまする」

「それごらん、知つていくせに」

「それでもお嬢様、あの殿様を、わたしふぜいし風情が知っていると申し上げては恐れ多うございますね」

「いいえ、あの殿様はお前を知っている、お前はあの殿様に御ごひいき鼻肩なびかたになつてゐるくせに」

「御鼻肩なんぞとお嬢様」

「いいえ、そうではありません、あの殿様からお前に、あんな結構な下され物があつたのは、あれは殿様がお前を好いてゐるからなのよ、わたしはそう思つてゐる」

「お嬢様、飛んでもないことでございます、あれはムクの働きなのでございますよ、ムクが殿様のお馬の危ないところを助けたから、ムクへのお礼心で、それで、わたしの方へ、あんな結構な下され物があつたのでございますよ」

「そればかりではありません、殿様がお帰りの時に、わたしはじつと見ていました、殿様は幾度も幾度もお前の姿を振返つておいでになりました、お前はそれを知らなかつたであらうけれど、わたしはちゃんと見ていました、お前はあの殿様に思われているのに違いない、いいえ、わたしの見た眼に違いはありません」

お君は、お銀様からこの言葉を聞いた刹那せつなに、ポーツと面かおが赤くなりました。何ということはないが、胸に春風が吹いて、心の波が漂ただようような嬉しさでいっぱいになりました。けれど別に、お銀様の言葉には針がある、お君はそれを冷たく思いました。

「お嬢様、そんなことをおつしやつて、わたしをおなぶりなさいます」

「いいえ」

お銀様は、冷たい権けんのある言葉で首を横に振ったまま、お君の方を見返りもしませんでした。

「お嬢様、もうお帰りになつては如何いかでございます」

「いいえ」

お銀様は、お城の方ばかりを見ていました。お君もせんかたなしにお城の方を見ると、

「お君や、お前、あの殿様のところへお訪ねしてみる気はないかえ」

「どう致しまして、わたしなどが……」

「そうではありませぬ、お前がああ駒井様をお訪ねすれば、駒井様は、喜んで会つて下さるに違いない」

「どうしてそのようなことが……」

「ほかの人では、滅多にお会いになるまいけれど、お前が訪ねて行けば、あの殿様はきつと喜んでお会いなさる」

「お嬢様、そのようなお話は、もう御免を蒙りこうむとうございます、お行列でもお通りになるといけませぬから、あちらの方へ参りましょう」

「まあ、お待ち、お君、お前はそんなに帰ることばかり急せかないで、わたしの言うことをよく聞いておいで」

「はい」

「わたしは、お前に頼みたいことがある」

お銀様の言葉は、いよいよ権高くなつてしまいました。

「お嬢様、今更、そんなに改まつて」

「お前に頼みたいということは、いま言った通りお前はこれから、あの御支配の駒井能登守様のお邸まで行つて来ておくれ、

わたしはここで待っているから」

「お嬢様、そんなお使いが、わたくしなんぞに勤まるものでございましょうか」

「いいえ勤まります、勤まると思うから、わたしはお前に頼みます」

「まあ、どうしたらよろしうございましょう」

「これから行つて、橋を渡つて大手の御門へ入り、御門番には、御支配様のところへ通る、有野村の伊太夫から来たと言えば、きつと通して案内してくれますから、そうしてごらん」

「それでもお嬢様、殿様がお会い下さるか、下さらないか」

「まだお前、そんなことを言っているの。きつと会います、きつと殿様は、お前の訪ねたことを喜んで、直ぐにお前をお呼びになるにきまつている」

「お嬢様、それはただお嬢様の御推量だけでございましょう」

「そうではありませぬと言うに。それはお前よりも、わたしの方がよく知っている。そうしてお前、殿様の御前ごぜんへ出たら、この間のお礼を申し上げた上で、幸内のことを、よくお頼み申しておくれ、大切の刀を持つて行方ゆくえが知れなくなつて困っている、もしやこのお城の中のどなたかのお邸でお引止めになりはしないか、それとなく、殿様に申し上げてみておくれ。そうすれば何かお心当りがおありなさるかも知れない、あの殿様はきつと御親切なお骨折りをして下さるに違いない」

「そんならお嬢様、わたしが行つて、ともかくもお願い致してみましようか」

「そうしておくれ」

「わたしなんぞが、お訪ねをしたからとて……」

お君はお銀様の言葉というよりは、その圧力の烈しい命令に押しやられるようになって、大手の橋を渡つて御門番の方へと歩みました。お君はお銀様からせがまれて御門番のところへ行き、

「御支配様にお目にかかりたいのでございますが」

「御支配様は太田筑前守様か駒井能登守様か」

「駒井能登守様に」

「何の用で」

門番の足輕は六尺棒を突き立て、お君の姿をジロジロと見渡しておりました。

「あの、有野村の藤原の家から参りました、主人より殿様へのお使いでございます」

「左様か」

足輕は会得えとくしたような、会得しないような面をして、

「有野村の藤原家とあらば仔細しさいもあるまいけれど、御門鑑を御持参か」

「いいえ」

「御門鑑がなければ滅多に通すことはならない……」

と門番は権柄けんべいを作りましたけれど、そのあとへ持つて行つて、

「のだが……」

という言葉を付け加えて、

「駒井能登守様は格別の思召おぼしめしで、訪ねて来た人は誰でもお通

し申すように御沙汰があるから通すまいものでもない」

と言いました。

「有難うございます」

とお君はお辞儀をしました。

「しかし、ただいま御操練ごそうれんの最中でいらつしやるかも知れぬ、一応御様子を伺つて来るからお待ち召されよ。して、有野村の藤原の家から来たお前さんは何とおつしやるお名前じゃ」

「君と申しまする」

「よろしい、有野村の藤原の家から来たお君殿、ただいま取次いで上げる、暫くそこで待たつしやい」

門番の足輕は権柄けんぺいを作つたり、また粗略そりやくにも扱わないうように見せたりして、一人が廓くわくわの中へ入つて行きました。その間、お君は門番の控所で待たせられていました。

お君が門番の控所に腰をかけて待つていると、そこへ通りかかったのは役割の市五郎でありました。前は一蓮寺の境内でお君らの一行が興行をしている時に、木戸を突かれて大騒ぎを起したのがこの市五郎であります。市五郎はたいそう景氣のよい

身なりをして、懐手ふところで廓の内から御門の外へ出ようとして、計はからずもそこに控えていたお君の姿を見て足を留めて、お君の面かおをジロジロと見ました。お君はそれとは気がつかないでいる時、さきに取次に行つた足軽が戻つて来ました。

「案の如く駒井の殿様は御調練のお差図であるが、お前のことを申し上げると、直ぐにお許しになつた」

お君は足軽に導かれて行きます。

門番の控所を出た役割の市五郎は、何か考えながら廓の外へ出た時に、またも一人、柳の木の蔭に立っている妙齡の女を認めました。

市五郎は眼を丸くして後ろから、わざとその女の傍の方へ寄つて行きました。

「はてな、不思議なことがあるもの、今お城の中に入つ

た女がもうここへ来ている」

市五郎は自分の眼を拭いながら近寄りました。そこへ立っていた女は、いま控所で見たお君の姿と身なりも形も寸分違わないで、ただ頭巾を被っているのと、いないのとだけの相違ですから、あまりの不思議とその女の側近くやって来たために、柳の蔭でお城の方ばかりを向いていた女が急に振返りました。

振向かれて市五郎はタジタジとしました。後姿も衣紋えもんも寸分違わないけれど、目深まぶかい頭巾の間から現われた眼つきの鋭いこと。

お銀様が振返った時に、一時悸ぎよつとして市五郎は、すぐに足を立て直してなにげなき体ていで向うの方へ反そらせませます。

市五郎が同心長屋の角を町の方へ入った時分に、何も知らないお銀様は、まだお城の方を見て、お君の帰るのを待っている。

大菩薩峠 伯耆の安綱の巻

大菩薩峠 伯耆の安綱の巻

底本：「大菩薩峠 3」ちくま文庫、筑摩書房
1996（平成 8）年 1 月 24 日第 1 刷発行
1996（平成 8）年 3 月 1 日第 3 刷発行

底本の親本：「大菩薩峠 二」筑摩書房
1976（昭和 51）年 6 月 20 日初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：(株) モモ

校正：原田頌子

2001 年 10 月 6 日公開

2004 年 2 月 6 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。